

源氏物語爪印

— 薄雲・少女・玉鬘・初音・胡蝶 —

村 井 利 彦

薄 雲 卷

【1】薄雲卷のトピックスは四つある。明石姫君の二条院への移行。藤壺の死。密事の漏洩。齋宮女御に対する光源氏の恋情。この四つがどこからむかということが、この巻の問題点である。

【2】「冬になりゆくまゝに」という書き出し。松風卷の、光源氏と明石御方との再会が秋であったから、自然な時の流れである。

【3】「川づらの住ひ」とある。大井川の岸辺に面した位置に、大井別邸があったことが分かる。

【4】光源氏は明石御方に「かの近き所に思ひ立ちね」と言う。東院移行のすすめである。本来、東院は、明石御方を迎える施設であったのだから、この申し出は当然のものである。が、この申し出に素直に従わない明石御方の意味するところは、充分

に考える必要がある。これは、六条院構想の鍵となる発想はどこにあるかという問題に帰着する。かつて栄華を誇っていた本丸を再建する。本丸でなければ、本丸の主は帰ってはならぬ、ということではないか。

【5】明石姫君について「思ふ心あれば、かたじけなし」と光源氏は明石御方に言う。これは明らかに十年後に予測される姫君の入内、立后の予告である。普通に考えれば、紫上に子供が生まれる可能性がある現在、そう断案するのはためらわれよう。が、光源氏の子供の数についてはすでに、濤標巻で予告してある。したがって、これは、決定済みの事項であって変更されることはないという、強い響きがここにはある。源氏物語は、予定の路線を予定通り進行しているのだということである。紫上が子供を生むハプニングなど期待すべきではない。予定をどう実現してゆくか、予定の道程にこそ物語の興味はあるのだということが、宣言されているのだと理解してよい条文である。

【6】「あらためてやむごとなきかたにもてなされたまふとも、人の漏り聞かむことは、なかなかやつくろひがたくおぼされむ」と明石御方は思う。常識というものであらう。しかし、光源氏の現在の権力を考えると、紫上の養女ということにしておけば、絵合巻の須磨絵のような有無を言わせぬ効果があると考えておくといひではないかと思う。事実、この姫君の存在こそ、「須磨忘るべからず」そのものであったのであつてみれば、なおさらのことである。絵より人間という流れ。

【7】明石御方を説得するために、斎宮女御に対するこれまでの紫上の世話ぶりを語る。斎宮女御の設定は、明石姫君の構想の露払いなのであらうか。とすれば、これは実に豪華な前座である。この時、斎宮女御は二十一歳。紫上もほぼ同年齢である。「前斎宮のおとなびものしたまふをだに、あながちにあつかひきこゆ」と本文にある。紫上は幼いころ難遊びが好きだった。彼女は、そのまま大人になっている。俗に汚れた大人になっているのである。

【8】明石御方の、紫上に対する認識。「げにいにしへは、いかりのことに定まりたまふべきかと、つてにてもほの聞こえし御心の、名残なくしづまりたまへるは、おぼろけの御宿世にもあらず」は、末摘花の叔母の意見と同じである。（逢生巻）。

明石御方の常識の確かさを示す一文であらう。紫上に実子を差し出し耐えざるをえない、彼女の人生の難渋をさりげなく示している。

【9】そして、「わが身はとてまかくても同じこと、生い先遠き

人の御うへも」という明石御方の認識は、全くもってかつての藤壺である。藤壺は身を捨てて子供・東宮のために生きた。明石御方は今、藤壺の道を選択したのである。この瞬間、皮肉なことに、藤壺の、源氏物語からの退場する場がたちまちにして形成されたのだというべきであらう。この時、藤壺もまた、斎宮女御と同じく、豪華絢爛たる前座と化して、明石一族の支持母体となる。これは言い過ぎではないと私は考える。

【10】姫君を手放した後の淋しさはもちろんのこと、光源氏の愛が衰えることを思う明石御方。藤壺はかつて、東宮問題でもって光源氏との愛の修羅場から脱出した。明石御方は、光源氏とのことを修羅場だとは思っていない。

【11】「思ひやり深き人」明石尼君の説得は、明石入道の意思の代行である。彼女は恐らくこの説得に彼女の全人生を賭けたのではあるまいか。「つひにこの御ためによるべからむことをこそ思はめ」。尼君は、相当遠くを見ている。「母方からこそ、帝の御子も際々におはすめれ」は露骨だが事実である。その例として、「更衣腹」の光源氏を持ち出しているところに注意したい。遠く桐壺巻のことが思われる。先帝を父に持ち后を母としていた「人の思ふべき暇なき」藤壺は、桐壺更衣とは扱いが全く違っていたではないか。

【12】尼君の言葉「故大納言の、今ひとときざみなり劣りたまひて、更衣腹と言はれたまひしけじめ」は、当時を実際に知っている人の言葉で、説得力がある。須磨巻で、明石入道と桐壺更衣は従兄妹であるとあった。尼君は、光源氏の母と同世代。実

際、言葉を交わした仲であったと想像される。

【13】作者は、この尼君に、夫の遺志を貫いた桐壺更衣の母のイメージを重ねようとしているのではないか。桐壺巻で挫折した更衣の母の、見果てぬ夢を見る。というのが尼君の人生だということではないかと思う。

【14】明石御方は、決断するにあたって、「さかしき人の心の占どもにも、もの問はせなど」している。陰陽師、宿曜にも念のためあたっているのである。周到な彼女らしい行為である。光源氏を臣下に下した時の桐壺院に似ている。

【15】「なほわたりたまひてはまさるべし」は、明石巻の「退きて咎なし」の逆である。（明石巻）。意識してそうしているのだろうか。

【16】乳母との別れ。乳母はいまや完全に明石御方と不即不離の関係にある。（松風巻）。だから、彼女が当分の間、唯一の信頼できるパイプである。また、彼女が光源氏に遠慮するような女性ではないというのも、明石御方にとっては心丈夫であったにちがいない。

【17】別れの時は「師走」。作者は、「雪霰がちに、心細さまさ」る季節を選んでいる。年のうちぎりぎりまで、明石御方は粘ったのである。ちなみに、明石御方が大井にでてきたのは秋。ここまで、五カ月近く経過している。

【18】明石御方と明石姫君との別れを冬とし、近い将来に成立する六条院における明石御方の位置を冬にするという発想は、明石御方の意識を、この別れの季節に固定するという含意なの

ではないかと思う。

【19】明石御方と姫君の、親子の別れの段は哀切である。こういう大衆演劇的な場面は、作者の得意とするところとみえる。光源氏の来訪を「例は待ちきこゆるに、さならむとおぼゆることにより、胸うちつぶれて、人やりならずおぼゆ」。「姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ」。姫君が明石御方の「袖をとらへて、乗りたまへと引く」。明石御方が、牛車のところまで姫君を「みづから抱」いて出てくる場面も、前の巻に乳母が抱いて光源氏を見送る場面を書いていたから、あの場面と対比されてひとしお哀れである。途中、姫君が牛車の中で寝るという描写も、並の腕では書けない余裕の表現であろう。

【20】「この春より生ほす御髪、尼そぎのほどにて」とある。子供は、生まれてから二歳までは剃っている。三歳から髪をのばすのが当時の習慣であったことが、これで分かる。

【21】「末遠き二葉の松に引き別れいつか木高きかげを見るべき」分かりやすい歌である。明石御方の当面のテーマが簡潔にこの歌でもって表現されている。「木高きかげ」に思いがこもっている。源氏物語は、この「二葉」の小松が「木高きかげ」となつて世を覆うことになるまでが書かれた物語なのである。

【22】道中の光源氏の思い。「いかに、罪や得らむ」。落標巻における、朱雀院に対する気持ちと同じである。政治の非情さ。人情を踏みにじることもある反省。光源氏の忸怩たる思いである。

【23】「乳母の局には、西の渡殿の、北に当たれるをせさせたま

へり」とある。紫式部が、中宮彰子に仕えていた土御門殿の局と同じ設定である。明石姫君の乳母の位置に自己を置くという発想だろうか。これから以後展開される明石姫君教育へのなみなみならぬ決意表明ととるべきであろうか。作者が乳母となつて、紫上とともに明石姫君を教育するということ。私が紫上だといつていいところ、身の程を心得ていると考えるべきか。

【24】子供のできない紫上。そうした作者の意図はなにか。このあたりで読者がいやおうなしに考えざるをえない問題である。女の修羅場と無縁な存在。「人の思ふべき瑕なきこと」、これが紫上のテーマ。これも物語なのだということだろうか。

【25】乳母以外に「やむごとなき人の乳ある、添へて参りたまふ」とある。乳を与えるのは乳母だけではなくたようである。充分に乳を与える用意をしていたと見える。珍しい日常場面である。この女性も乳母とよぶ。光源氏にも複数乳母がいたことが確認される。

【26】年末に行われた明石姫君の袴着は豪勢なものであったとみえるが、物語においては、光源氏の、毎日がお祭りのような日常に埋没されて、多く語られていない。ここは、姫君の幸福より、明石御方の不幸に読者の注意をひきたいためと思われる。

【27】年内に大井を訪れる光源氏の優しさ。しかし、こういうこともしよつちゅうというわけにもいくまい。だんだんと足が遠のくのではないか。と考えるのが人情というものである。こうして、作者は徐々にではあるが、六条院構築への道を切り開いてゆくことになる。

【28】紫上は、光源氏が大堰に赴くことに嫉妬していない。彼女は「うつくしき人に」に免じて光源氏の「罪ゆるしきこえたまへり」という心境になっている。「斧の柄」をもちだした松風巻の凄味とは相当に様変わりしている。姫君も素直な性格で、紫上によくついたり記してある。

【29】新春の場面。初音巻の予兆であろう。

【30】「東の院の対の御方」つまり花散里の描写。彼女はすっかり落ち着いてしまっている。「かばかりの宿世なりける身」は、花散里のテーマである。身の程を知ることによる女の平安。この、花散里の人生観念は、ここにこうして置かれることによって、明石御方の現在および未来の影となる。「夜光る玉」を紫上に差し上げてしまった瞬間から、明石御方はだだの人にはすぎなくなる危険性の中にあるというのは事実である。花散里の諦観に、これ以後の明石御方がはたして満足するやいなや。けだし見ものであらう。

【31】花散里を「東院」の「対の御方」と呼ぶ。彼女と紫上の関係を考える上で参考になる。花散里は疑似紫上なのではないか。

【32】新春、大井を訪れる光源氏の姿を長々と書いた目的は、「舟とむる遠方人」である明石御方がただの人ではないということ。少なくとも花散里には匹敵する人なのだということを読者に認識させるためだろう。読者の意識が、作者の意識と相当に乖離していることは、作者もよく知っていたものと思われる。

【33】紫上の歌を「渡殿の戸口」までもっていった「中将」は、

須磨や落標にでてくる中将。幻巻で印象的に語られる中将のことでもあろう。

【34】光源氏と紫上の、催馬楽「桜人」をふまえたやりとりは、ふたりの満足感にみちている。明石御方は、かくして紫上にも認知されたわけである。姫君の可愛さがもたらした効果である。

【35】明石姫君を「ふところに入れて、うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ、たはぶれるたまへる」紫上。母になれない紫上が、母の真似をする。これも、作者得意の通俗小説タッチの描写である。この紫上の様子は、道長が彰子の生んだ皇子を可愛がった様子に似ている。母になった紫上は、このように可愛い子供を手放した母の気持ちがかかるようになっていく。(28)。

【36】光源氏の、明石御方に対する思い。受領の女との結婚は「世の常」で、例がないわけではない。明石御方の人柄は、自分の妻として不足はない。彼女の欠点は「世に似ぬひがものなる親の聞こえ」にある。この光源氏の思念からすると、明石入道は噂の男。都での評判は、昔相当に悪かったし、今も悪いらしい。入道がついてこなかったのは正解だったことが、ここに分かる。入道は、その昔、どんな性格で、どんな奇行に走ったのか。気になるところだ。

【37】「夢のわたりの浮橋か」。夢浮橋の発想は「世の中は夢の渡りの浮橋かうちわたりつつものをこそ思へ」の古歌による。源氏物語が夢浮橋巻で終わるということは、この源氏物語が物思いの絶えることのない世の中の出来事を書いた物語なのだと

いうことであろうか。この言葉が、夢浮橋巻ではなく、この巻にあるのも何か含むところがあるのだろうか。先の中将の存在といい、この夢浮橋の言葉といい、作者の構想のなかで、すでに源氏物語の構想は完成してしまっているように見たい。結局、源氏物語が、二葉の松が巨大な松に成長する物語だとすれば、その始発点に終点の語句を置くということは、一定の意味があるとみなされてよからう。

【38】明石御方の性格が描写されている。「過ぎたりとおぼすばかりのことはし出す、また、いたく卑下せずなどして、御心おきてにもて違ふことなく、いとめやすくぞありける」。賢明な処世をうかがわせる記述である。「女もかかる御心のほどを見知りきこえて」こういう態度をとっているという前段がある。だから、明石御方の聡明さ、賢さが余計に印象づけられるわけである。「かばかりの宿世」と観念している花散里を、どこか思わせる書き振りにとも注意したい。「近きほどにまじらひては、なかなかいと目馴れて、人あなづられなることもぞあらまし、たまさかにても、かやうにふりはへたまへるこそたけきこちすれ」という大井を合理化する明石御方の発想は、七夕の逢瀬を夢見た空蟬のかつての夢の実現であろう。受領階級の女の夢は、作者の夢、源氏物語を享受していた当時の読者の夢でもある。

【39】明石入道、一喜一憂の寸描。入道も「人は通はしつづ」情報収集に努めていたらしい。

【40】葵上の父・太政大臣の死。これは、光源氏が政治の矢面

に立たねばならない日が到来したことを意味する。帝は「大人
大人しう」とはいえ、まだ十四歳。源氏以外に「御後見したま
ふべき人」はいない。嵯峨御堂での「静かなる御本意」はます
ます遠ざからざるを得ない。きたるべき六条院の構想は、彼の
権力の反映というより、この本意への志向と考えるべきではあ
るまいか。「静かなる御本意」を遂げるための前段階としての
六条院。太陰は朝市に隠れる、という発想であろうか。（『文
選』卷二十二「反招隱詩」。あるいは「和光同塵」か。

【41】天変地異は、須磨以来の出来事。政変感覚がこの巻を覆
う。密事漏洩、帝の讓位申し出に、これはまっすぐに向かつて
いる。「内の大臣」光源氏のみ、この天変地異の意味するところ
を承知している。

【42】藤壺は「入道後の宮」と呼ばれている。絵合巻では一貫
して「中宮」であった。現役感覚から、出家感覚へとこの巻の
藤壺は転換している。これは藤壺の死の巻にふさわしい呼称で
あろう。

【43】藤壺の死は三月。正月発病で、およそ三カ月の病である。
病勢は急激に進行したものと推察される。

【44】帝の見舞い。桐壺院死亡時と違い、今は「いといはけな
く」はなく、「もの深く」おぼす年頃である。帝を運命と正対
させようとする作者の姿勢がうかがえよう。

【45】藤壺の死亡年齢を三十七歳と設定した理由は何か。「つつ
しませたまふべき御年」つまり厄年の発想もさることながら、
老いらくの来るといふ四十歳に少々余した歳にするという配慮

もあったものと思われる。「いと若く盛りにおはします」時の
死という設定である。

【46】藤壺の総括。「高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心のう
ちに飽かず思ふことも人にまさりける身」。彼女のこころ残り
は、桐壺帝が、「夢のうちに、かかる事の心を知らせたまは」
ず亡くなったこと。本文にはこれのみしか書いていない。が、
光源氏に対する自分の愛を殺したこと。この一点も含まれよう。
さて、桐壺帝に対する藤壺の忸怩たる思いが、この巻の夜居僧
都の発言を招来したのだと考えておくとよいかもしれない。

【47】光源氏の前で藤壺は最後まで公人としてふるまう。最後
の言葉「院の遺言にかなひて、内裏の御後見つかうまつりたま
ふこと、年ごろ思ひ知りはべることも多かれど、何につけてかは、
その心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ、のどかに
思ひはべりけるを、今なむあはれにくちをしく」は、光源氏へ
の感謝の言葉だが、彼への愛がにじんでいる。これは、「年ご
ろおぼし絶えたりつる筋さへ、今一度聞こえずなりぬるがいみ
じくおぼされて」訪れた光源氏への返答に充分なっている。

【48】光源氏に見取られて死ねた藤壺は幸せであったものではあ
るまいか。「燈などの消え入るやうに」死んだという記述は、
仏の入滅に準じた表現だから、最大級の敬意。これ以上のはな
むけはない。

【49】権力者の陥る傾向の指摘。「豪家にことよせて、人の愁へ
とあることなどもおのづからうちまじるを」。当時もこういう
例が多々あり、紫式部のよく知るところであったとみえる。

【50】藤壺に死なれた光源氏は、「花の宴のをり」を思い出している。あの頃が二人にとって最高の思い出なのである。「今年ばかりは」墨染めに咲け。とはこういう時の歌なのであろう。

【51】光源氏の独詠。「入り日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる」の「薄雲」がこの巻の巻名となっている。

藤原定家の代表歌「春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別る横雲の空」は、源氏物語の終章、「夢浮橋」巻末における薫の気持ち詠んだものではなく、この巻の、この時の光源氏の気持ちを詠んだものと考えようがよいのではないか。実際、「夢の浮橋」はこの巻にある言葉である。【37】。

【52】夜居の僧都の紹介。「この入道の宮の母後の御世より伝はりて、次々の御祈りの師にてさぶらひける僧都」で、「年七十ばかり」。「今は終わりの行ひをせむとて」つまり、藤壺のために最後の祈禱をすべく山から出てきた男。故太政大臣や明石入道、あるいは北山僧都と同世代。先帝の時代の生き証人である。光源氏の年齢が現在三十二歳くらい。彼は三十代から藤壺の「祈りの師」であつたわけだ。こういう人物をここに出したのは、藤壺の意味を、もっと違う、遠い視点から引いて眺めるという発想ではないか。この視点は、源氏物語の本質に関わるものと考えられる。

【53】藤壺の母は先帝の后。「母後の御世より伝はりて」とあるから、母後の時代は、夜居の僧都の年齢七十の範囲内である。母後の時代は先帝の時代でもあるから、先帝の時代は、そう遠い過去ではない。藤壺は、その先帝の時代の名残。その名残に

光源氏はつらなる存在であつたことが、ここであらためて確認できる。明石姫君は、その先帝の正統なる系譜上の人物と位置づけられているのではないか。

【54】「天の眼」「仏天の告げ」とはいったいどういうことか。庚申の発想か。ならば道教だ。「仏天の告げ」ということは、藤壺の意思ということだろうか。

【55】「法師は、聖といへどもあるまじき横様の妬み深く、うたであるもの」こういうタイプの法師は当時意外に多かったものとみえる。

【56】夜居の僧の証言によれば、藤壺は光源氏の須磨行きを、罪の報いだと確信し、僧都に祈禱を命じていたことが分かる。光源氏は、ひょっとしたら、須磨の受難でもって罪は濯がれたと考えていたのかもしれない。薫が生まれた時、そう思うように。（柏木巻）。もしそうだとしたら、夜居の僧の密奏は、そういう光源氏の甘さを打ち砕くものである。

【57】光源氏が須磨退居を余儀無くされた事件を「事の違ひめ」と表現している。政変で一旦敗北した者が復活し、過去をふりかえった時に使う表現か。何かの間違いという発想である。若菜上巻で、光源氏が、明石入道が明石に下向した事情を「ものの違ひめ」とほとんど同じ表現でとらえている。若菜巻のこの条を読むまで記憶しておくべきことである。

【58】僧は、光源氏から命じられた祈禱の内容を詳細に語った。密奏を受けた帝が「あさましうめづらかにて、恐ろしうも悲しうも、さまざまに御心乱れた」のは、冷泉帝が生まれ、桐壺帝

の感想を聞いた時の、光源氏の激しい動揺表現に同じである。(紅葉賀巻)。わざと同じ表現にしたものと思われる。僧は、事の詳細をあますところなく帝に語ったのである。

【59】僧都の言葉の中に「王命婦」の名前が出てくる。僧都の言葉に説得力を与える処置であろう。ところで、今、王命婦はどうしているのだろうか。彼女は、死の時、藤壺の側にいなかった。

【60】近頃の変地異の理由。帝が「いときなく、ものの心しろしめすまじかりつるほど」ならばともかく、ようやく成人し「何ごとまわきまへさせたまふべき時」になった今、天が帝に「咎をも示す」のである。と、夜居の僧は解説する。後は、帝の御意のままに。という発想である。以下、帝が懊悩することになる。(44)。

【61】「よろづのこと、親の御世よりはじまる」という僧都の立言も面白い。親の因果が子にたたるという発想であろうか。「大臣のかくだ人にて世につかへたまふも、あはれにかたじけなかりけること」という帝の慚愧の念も、僧都の立言に根ざした感情である。関係ないかもしれないが、この伝でいけば、祖父と孫は責任の外ということになる。

【62】式部卿の死。朝顔斎院の父である。次巻の用意であろう。彼は、桐壺時代の重要人物であり、葵上の父・太政大臣と同期。先代の人物の度重なる死亡は、変地異をの強調でもある。また、世代交代の印象を強めることにもなる。

【63】帝の退位の意味を聞いた光源氏が、思い止まるように説

得する姿は、かつての弘徽殿太后そのままではないか。世は移り世代は変わって、攻守ところを変えた図である。

【64】光源氏が説得する。「聖の帝の世に横様の乱れ出で来ること、唐土にもはべりける。わが国にもさなむはべる」。わが国の例はどのようなものを作者は考えているのであろうか。醍醐天皇時代の菅原道真、村上天皇時代の平将門・藤原純友のことだろうか。太政大臣や式部卿の死は「ことわりの齢どもの、時至」った結果だと喝破する光源氏の言葉も面白い。藤壺の場合はどうなのだと反問したくないか。

【65】結局、帝は光源氏に言えない。しかし、察しのよい光源氏は、事態を了解する。このあたりの展開、親子の情がよってなかなかあわれが深い。

【66】帝は、事の詳細を王命婦に聞こうとして思いとどまる。王命婦は健在のようである。(59)。

【67】先例を調査する冷泉帝。結果、「唐土には、あらはれても忍びても、乱りがはしきこといと多かりけり。日本には、さらに御覧じ得るところなし」と書いたのは、紫式部の並々ならぬ学識と自信であろう。彼女は、中国の先例は『史記』の、たとえば呂太后本紀などで把握し、日本の事例は『日本紀』つまり六国史を通読して調査している。無いと断言したところは、紫式部が六国史の内容を完璧に把握していることの証拠である。また続けて「たとひあらむにても、かやうの忍びたらむことをば、いかで伝へ知るやうのあらむ」と書いたのは、六国史が権力者の都合によって歴史が歪曲されていることを承知している

ということであろうかと推測される。史書を妄信せず冷めた目で読む紫式部の姿が彷彿されるところだ。また、日本の歴史上において、光源氏と藤壺のような事例があったという点について、紫式部には、相当の確信があった。あったればこそその記述であろう。この記事は、紫式部の学問の凄味を示す結果になるし、源氏物語のレベルの高さを決定的なものとすることであろうことは疑いない。

【68】「秋の司召に」と、季節が春から秋に飛ぶ。このあたりの省略も、風雲急を告げて、なかなかの迫力である。

【69】光源氏への讓位騒動の記事は、読者に桐壺巻、高麗の相人の予言を思い起こさせる。光源氏が帝になると「乱れ憂ふることやあらむ」。つまりは天下大乱となる。「ただもとの御おきてのままに、朝廷につかうまつりて」という光源氏の辞退は当然の結果ということになる。しかし、ここで、こういう操作をするということは、読者に、光源氏の人生の意味を考えさせようという作者の意図が透けて見えるではないか。そうすること、この巻で死んだ藤壺の人生の問い直しになるからである。藤壺と光源氏の錯誤は正統なものであったのだ。という追認の雰囲気作りである。これは、藤壺の人生に対する最大のはなわけではないか。と同時に、源氏物語そのもので作者が作り上げたかったものなのではないかと思うが、いかが。

【70】光源氏、太政大臣内定。光源氏は内大臣から、いきなり太政大臣に昇進している。【41】。破格の出世は、讓位騒動の余波である。権中納言は、大納言に昇進した。

【71】光源氏の出家意識。「今すこしの齢かさなりはべりなば、のどかなる行ひに籠もりはべりなむ」「ともかくも静かなるさまにて」は、六条院への道をひらくものである。もちろん、六条院は出家への前段階であるけれども。この太政大臣内定、讓位騒動は、そういう六条院形成の機運を一気に高めたことは事実であろう。光源氏は、この俗世から逃走したい心境にある。六条院は、その光源氏の心境の具体的表現なのだ。という解釈である。

【72】王命婦の情報。「御匣殿のかはりたる所に移りて、曹司たまはりて参りたり」。彼女は、冷泉帝にお仕えしているのである。【59】【66】。藤壺の身代わりとなって冷泉帝に奉仕しているということか。光源氏は、機密漏洩の事情を彼女に聞いている。もちろん、彼女は漏らしていない。が、彼女は藤壺に従って出家したはずである。（賢木巻）。還俗したのであるか。須磨明石以降の藤壺の扱いといい、この王命婦の処置といい、作者はちょっと便宜的である。

【73】秋。斎宮女御が二条院へ里下がりする。今や天下晴れての親ぶりを示す光源氏は彼女に「かの野の宮に立ちわづらひし曙」の話をする。この時、光源氏は、ひどく回想的な心理になっているのである。これも、藤壺の死の思わぬ余波といえよう。六条御息所への痛恨。挫折した恋の思ひ出を光源氏は語った。「つひに心も解けず、むすばはれて止みゆること」が二つあると言いながら一つしか語らなかった。藤壺のことは、さすがに口にできない。が、読者にはこれで十分に伝わったはずである。

【74】斎宮女御への話のなかで、花散里にも言及している。「心ばへの憎からぬなど、われも人も見たまへあきらめて、いとこそさはやかなれ」。花散里、これのみが、安心できる結果となっているということである。(30)。

【75】光源氏は元談めかしながら、斎宮女御に恋情をほのめかす。この時、光源氏は普通ではない。藤壺の死の余波である。聞かされた斎宮女御も、「むつかし」と思い困惑するばかりなのは気の毒というものだ。

【76】光源氏は女御に現在の心境を語る。「生ける世の限り、思ふこと残さず後の世のつとめも心にまかせて、籠もりなむと思ひはべる」。嵯峨の御堂の発想である。

【77】「数ならぬ幼き人のはべる、生い先いと待ち遠なりや」という光源氏は、政権を奪取した九九五年頃の道長に似ている。あのころ、頼みの彰子はまだ三歳ぐらいであった。光源氏に、この世俗的発想があるかぎり、未だ嵯峨の御堂に籠もるわけにはいかない。(76)。この矛盾する二つの想念を調和する世界こそ、六条院であったということが、このあたりでよく理解できるはずである。

【78】光源氏は、斎宮女御に春秋優劣論をもちかける。春秋の論と言え、すぐに万葉集の事例が想起されよう。

天皇の内大臣藤原朝臣に詔して、春山万花の艶きと、秋山千葉の彩れるとを競ひ憐ましめたまひし時に、額田王の、歌を以てこれを判めし歌

冬ごもり 春ざり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざ

りし花も咲けれど 山をしみ 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそしのふ 青きをば 置きてそ嘆く そこし恨めし 秋山そ我は

(万葉集 巻第一 16)

この歌を春秋優劣論に単純化すべきではない。この歌の二つ前には、中大兄皇子の大和三山の歌がある。

香具山は 畝傍を惜しと 耳梨と 相争ひき 神代より かくにあるらし 古も 然にあれこそ うつせみも 妻を 争ふらしき

反歌

香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に來し印南国原
(万葉集 巻第一 13・14)

また、二つ後ろには、有名な蒲生野遊獵の歌がある。

天皇の蒲生野に遊獵したまひし時に、額田王の作りし歌あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

皇太子の答へし御歌

紫のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも
(万葉集巻第一 20・21)

前後の歌に挾撃されて、額田王の春秋優劣歌は、天智天皇天武天皇優劣論に還元され政治化されてしまうように見える。紫式部は、ここで春秋論をもちだし、天智天武の皇統問題を読者の脳裏にかきたて、古代神話を巧妙にまぶしながら、光源氏と藤壺の関係を、正統のものとして位置づけようと目論んでいるように見えるが如何。

【79】春秋の論にことよせて、光源氏は齋宮女御に六条院の構想を語っている。彼は六条院とは意識していないけれども。

「狭き垣根のうちなりとも、そのをりをりの心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覽せさせむと思ひたまふる」。春秋の論は、六条院実現への前段階である。

【80】光源氏の齋宮女御に対する恋情は、今に始まったことではないが、この巻の、しつこさは、藤壺という過去を失った男の、過去の形見へのこだわりという側面が強い。これは、光源氏の犯した罪を再認識させると同時に、次巻、朝顔という過去そのものの女に対する最後の恋への伏線であろう。

【81】光源氏に対して齋宮女御は嫌悪感を抱いている。「心得ずとおぼしたる御けしき」「いとうたてとおぼいたる」「心づきなうぞおぼしなりぬる」「うとましくおぼさる」と、心理の流れが深刻になっていっている。これは、作者による読者の誘導だろうか。光源氏離れ、である。

【82】齋宮女御への恋を反省して、光源氏は「いにしへの好きは、思ひやりすくなきほどのあやまちに、仏神もゆるしたまひけむ」と言う。そうは問屋が卸すものか、というのが読者の感想ではないか。

【83】「なはこの道は、うしろやすく深きかたのまさりけるかな」という光源氏の認識。恋の道は深い。愛執の罪もまた深いといったところか。「うしろやすく」と言っているが、本当に光源氏は、恋の道を踏み外さぬ境地に達しているのだろうか。次の巻

で試されよう。

【84】光源氏は、紫上にも六条院の構想めいたことを語っている。齋宮女御と対にしているところは、紫上の格上げであろう。この意識は、光源氏の帝王意識と連動していると思うがいかが。

【85】明石御方の心情を付度する光源氏。「心やすく立ち出でて、おほぞうの住ひはせじ」。そう思っているらしい明石御方を「おほけなし」とも思う。とはいえ、こう意識していることが、光源氏をして「おほぞうの住ひ」ではない六条院を作らせるのだと考えておきたい。六条院は、明石一族を迎え入れる施設なのである。

【86】大井の明石の許への訪れで、この巻を閉じているのも、首尾が一貫していて、哀れである。

【87】明石御方の歌。「いさりせしかげ忘れぬ篝火は身の浮舟やしたひ来にけむ」。「浮舟」のイメージをここで出す。すでに作者の内部では、源氏物語は終わっているのではないか。【37】

少女巻

【1】「宮の御果ても過ぎぬれば」によって、前巻・朝顔巻は、世の中全体が服喪中の出来事であったことを示す。ちなみに藤壺の死は前年三月である。このことは、朝顔巻の意味を考える上で重要なポイントであろう。朝顔は藤壺の余波。藤壺追悼の

巻なのである。

【2】藤壺の一周忌があけて、賀茂祭のころから書き出すということは、朝顔に決着をつけようという意図であろうか。その昔、車争いがおこなわれたころ、彼女は自分の人生を決断した。(葵巻)。また、去年まで彼女は、この祭の主役である賀茂斎院であった。彼女が斎院であったのは、およそ十年間。時は流れたのである。

【3】朝顔の父・式部卿が亡くなったのは、去年の夏。ちょうど賀茂祭の頃であったと見える。父母の服喪は一年。朝顔は十年前、賀茂斎院として裸ぎをした。今日は、父の除服の裸ぎ。光源氏の、朝顔に宛てた歌は、そのあたりの偶然をついていて、朝顔の心に届いたものと察せられる。朝顔も「をりのあはれ」に返歌している。「藤衣着しは昨日と思ふまに今日はみそぎの瀬にかはる世を」は、今日の実感と、矢のように速くすぎた十年の時間経過が読み込まれている。

【4】光源氏の手紙が立文であったことが、二人の恋の終わりを象徴している。光源氏は朝顔の後援者に後退しているといえようか。

【5】女五宮は朝顔に言う。「この君の、昨日今日の児と思ひしを」。彼女は、光源氏を幼年期より知っている人なのである。この台詞、間もなく光源氏が我が子・夕霧でもって実感することになる。二つの世代交代が描かれれば、世代交代も本物である。このあたりの時の経過の強調は、朝顔巻のため押しである。光源氏とて、時間経過の例外ではない。

【6】女五宮の発想によれば、朝顔と光源氏との結婚は、父・故式部卿も賛成であった。が、葵上への遠慮から、朝顔の結婚はひかえていたのである。葵上亡き今は、何の支障もない。この「古代」な発想のなかに、葵上への配慮が全くない点に注意すべきである。源氏物語の志向が「古代」であれば、なおさらの問題であろう。この発想は、若菜巻、朱雀院が女三宮と光源氏との結婚を考える時の胸のうちまで、真っ直ぐに延び、接続してゆく発想である。最上流貴族社会の思考のなかに、葵上正室論は存在しない。彼女は、「古代」なる発想からすれば、光源氏の愛人にすぎない。しかし、わざわざこれを「古代」と断っているところに、作者および源氏物語読者の現代がある、と考へるべきであろう。朝顔の決断は、はなはだ現代的で、時代の志向に合っていると捉えなおす必要を感じる。

【7】葵上の母・大宮は「三の宮」であったことが初めてここで明らかにされる。若菜巻で臣下に天下ることになる女三宮の粗型、ということか。このあたり、作者の細かい配慮がうかがえる。

【8】自分は「心ごはきもの」で、父にもそう思われていた。という朝顔の認識。女五宮の勧めを、「今さらにまた世になびきはべらむも、いとつきなきことになむ」といってとりあわない。晩年になって恥をかきたくないのである。この最高貴族の誇りは、未摘花にも共通する。

【9】「あながちなるさまに、御心破りきこえむなどはおぼさざるべし」という光源氏の気持ちでもって、朝顔問題は決着する。

紫上の危機は、これで一応回避される。しかし、あくまでも一応のものであって、この問題は若菜巻までの保留条項とされたにすぎない。

【10】夕霧の元服問題に話題が移行する。女五宮が大宮を話題にしていたから、この移行に違和感はない。さて、夕霧の年齢は十二歳。葵上の死から、それだけ年月が経過しているのである。いま問題となっている正室問題も、この年月を考慮すれば、いまさらなんだの感を深くしよう。紫上の気持ちもよく分かるし、朝顔の判断の聡明さ正当性はこれで明らかだろう。それにしても、息子の元服は、世代交代の波が光源氏の足下に忍び寄る図柄である。【5】。

【11】夕霧は、母の死以後、祖母大宮の許で養育されていたと見える。元服の儀式は、大宮の心中を慮り、二条院ではなく大宮邸で執り行われている。

【12】かつての頭中将は現在「右大将」。夕霧の「御伯父の殿はら」、つまり故太政大臣の子息達は、みな「上達部」。藤原氏の威勢は、この段階でなかなかのものである。源氏物語においては、このあたりまでが藤原氏の全盛時代で、以後、衰亡しゆくことになる。夕霧問題がそのきっかけとなるという構想なのかもしれない。

【13】「四位になしてむ」。光源氏クラスの貴族の子弟なら、元服するとすぐに四位、悪くとも五位になるのが常識であった。蔭位の制では、五位以上の官僚の子および三位以上の官僚の孫は、二十一歳になると最高従五位下の位が授けられることになっ

ている。夕霧の場合は、まだ十二歳であるから、六位でも何らさしつかえないのだけれども、当時の常識に照らせば、「浅葱にて殿上にかへりたまふ」のは、いかにも異常であったのである。六位だと殿上人にはなれないのだが、夕霧は藏人に任じられたものと推測される。藏人なら、六位でも殿上人にはなれる。【14】夕霧を四位にすることに關する光源氏の心情。「わが心にまかせたる世にて、しかゆくりなからむも、なかなか目馴れたることなり」。伊周をどんどん出世させた道隆の近い例を意識した思念だろうか。この、世間をおやっと思わせる決定を見せるというのも、光源氏の政治なかもしれない。政治ショーであった絵合の後、光源氏は、自分の子を使って、また世間に一石を投じたのだらう。夕霧を「浅葱」、つまり六位の殿上人とする。これは、相当に意表をつく人事であったのだから。

【15】「大学」が盛んであったのは、九世紀末のころまで。『源氏物語』のモデルとなった十世紀は、なんとかもちたえているといったところが現状で、『源氏物語』が成立した十一世紀初頭のあたりからは衰退期となる。このことは、作者も充分知った上で話を展開しているものと思われる。

【16】淳和天皇の皇子であった恒貞親王は、仁明天皇時代の皇太子で、廃太子となった人である。彼が、皇太子であった時代、大学復興を志した説話がある。『後拾遺往生伝』『恒貞親王伝』。明石以後、菅原道真もし復活せしかばの仮定が源氏物語にはあったと考えてきた。それと同じく、こは、恒貞親王がもし廃太子されることなく、即位し親政をおこなっていたならば、とい

う歴史上の仮想が源氏物語にはあるのだと考えたい。

【17】光源氏の受けた教育の実態。「夜昼御前にさぶらひて、わずかなむはかなき書なども習ひはべりし。ただ、かしこき御手より伝へはべりし」。光源氏は、桐壺帝より直接習い、組織だった体系的学問をしていない。

【18】「今二三年をいたづらの年に思ひなして」。大学に通う年月は無用の時間。これに価値を見る。無用の用。実学より虚学。若い日に無駄な時間をもつことの重要性への言及である。

【19】大宮の不満に対する返事は、光源氏の教育論である。「何ごとも広き心を知らぬほどは、文の才をまねぶにも、琴笛の調べにも、音たへず、及ばぬところの多くなむはべりける」は、広い教養の裏付けがあつてはじめて専門がものになるというリベラルアーツ論。「漢魂和才」論と言い換えてもよい。「はかなき親にかしこき子のまさる例は、いとかたきこと」という逆進化論。どんな利口な子供でも、馬鹿な親より馬鹿だ。恵まれていてと学問で苦労する気になれない。恵まれた環境で育ったものは、その環境と運命を共にするしかない、という認識。時の変改に左右されない人物になるためには、学問に励み、自立の精神を身につけるべきだ。「才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるるかたも強うはべらめ」。正統な学問の上にたった政治能力、事務処理能力の發揮こそ盤石の処世なのだという発想である。漢魂和才。傾聴すべき意見ではないか。

【20】この教育論は、今は夕霧に向かったものであるけれども、夕霧の事例がやや修正されながら、今、紫上のもとで養育され

ている明石姫君の、失敗が許されぬ教育に適用されるものと考えられる。この点を留意しつつ、この教育論は読むべきものである。

【21】よい時は人は皆ちやほやするが、いったん零落すると鼻もひっかけられなくなるという光源氏の認識が、夕霧の教育論の根底にある。桐壺院亡き後の暗黒時代、須磨・明石の流離経験が、ここでものをいっているわけである。あるいは、一世代前の政変劇を念頭においての発言かもしれない。ままよ、光源氏とて、自分の人生の反省にもつき子供教育を考えている。世の親と選ぶところはない。かくて、教育は、いつの世を問わず、親の理想論に支配されるところとなる。

【22】大学とは、「つひの世のおもしろくなるべき心おきてを習う」ところであつた。三善清行の『意見十二箇条』の第三「請加給大学生徒食料事」に「国を治むるの道は賢能を源となす。賢を得るの方は学校を本となす」とある。

【23】「せまりたる大学の衆」というのが、当時の大学人に対する世間の認識であつたものと知れる。貧乏、偏屈といった印象である。実際、ここに見える大学教授の装束は借り着である。

彼らの作法も、失笑を買うほど変わっていた。大学をでても仕官できず、あたら白頭の老人となる現実を見て、親は子に大学を勧めなくなったという現実が、同じく三善清行の『意見十二箇条』の第三「請加給大学生徒食料事」に描かれている。これは、貴族社会の自殺行為であるという認識が作者にあったのではないか。学者の娘に生まれた紫式部の、自然な認識である。

【24】東院が、夕霧の字を付ける儀式に使用されている。源氏物語における、東院唯一の晴れ舞台である。この東院であるが、九世紀ごろ設立し十・十一世紀に隆盛した有力貴族の学生寄宿舎である「大学別曹」を意識したものかと思われる。藤原氏の勸学院、橘氏の学館院、王氏の奨学院。この別曹学生には無試験で諸国の掾官に任用される特権「三院年掌」があった。

【25】大学の衆が、当時いかに浮世離れした存在であったを如実に示す本文がある。【23】。そういう世界にこだわった光源氏は、紫式部の家の事情ともからみあっているものと思われる。父の為時や兄の唯規の日常立ち居振る舞いが反映されていると考えるべきではないか。だとすれば、ここは、「雨夜の品定め」の学者の娘の条に接続する。

【26】学者の漢文口調「おほし垣下あるじ、はなはだ非常にはべりたうぶ」は、雨夜の品定め、藤式部丞が語った学者の娘の話以来のものである。読者は、妙な懐かしさを覚えることだろう。「鳴り高し。鳴りやまむ。はなはだ非常なり。座を引きて立ちたうぶなむ」など、現在、学校でよくみられる風景ではないか。「うるさい。出ていけ」。

【27】「この道より出で立ちたまへる上達部」とあるが、そういう吉備真備や菅原道真の人物が、紫式部の時代にどのくらいいたのか具体的に調査して見る必要がある。光源氏の夕霧に対する教育方針は、こういう官僚テクノラート等の圧倒的支持をえたいらしい。「かかるかたざまをおぼし好みて、心ざしたまふがめでたきことと、いとど限りなく思ひきこえたまへり」。これ

も、光源氏の政治であろう。

【28】起承転結の「絶句」に比べ、「四韻」つまり律詩は難しいものであった。「ただの人」は絶句、律詩は博士の担当となっている。詩の内容は、いずれも夕霧礼賛。「高き家に生まれたまひて、世界の榮花にのみたはぶれたまふべき御身をもちて、窓の螢にむつび、枝の雪を馴らしたまふ心ざしのすぐれたる」。そうした光源氏礼讃でもある。

【29】博士たちと作文の会に臨み、「唐土に持てわたり伝へまほしげ」な作品を作る光源氏の「大臣」。これは、菅原道真のイメージである。この時、呼びとどめられた「博士、才人」「上達部、殿上人」たちこそ、光源氏の政治をバックアップした人々であったと考えられる。

【30】「女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、うたてあれば漏らしつ」。例によって男の世界の省略であるけれど、相当書いてからの言い訳はいかにもわざとらしい。こう書くことによって、むしろ逆に男の世界へと読者の読みを誘導しようという意図がうかがわれるところである。

【31】家庭教師をつけるのが貴族の勉強方法であったと知れる。

【32】「やがて、この院のうちに御曹司つくりて、まめやかに才深き師にあづけきこえたまひてぞ、学問せさせたまつる」とあるところを見ると、やはり東院は、大学別曹の発想で利用されたものであることが確認される。【24】。

【33】甘やかす大宮の世界から夕霧を遠ざける。教育における甘えの排除であろう。大宮のもとには、月に三度。あとは東院

の「静かなる所に籠めたまつりたまへる」とある。寄宿舎生活の発想と同じ。大学別曹である。【24】【32】。

【34】夕霧の性格。「おほかたの人がら、まめやかに、あだめきたるところなくおはすれば」。彼は、光源氏というより母親・葵上に似ているのである。

【35】夕霧が、四五月で『史記』を読了した。とあるのは、紫式部の個人的体験の反映であろうかと思われる。『史記』は全百三十巻。およそ一日一巻のペースである。『史記』をここで言っているということは、当時の学問が三史五経であったことを意味し、その中心が史記であったことを示唆している。

【36】夕霧は、大学寮の試験「寮試」のために『史記』の模擬試験をやっている。いつの時代も同じである。

【37】模擬試験には、かつての頭中将今の右大将もたちあっている。夕霧の成果に光源氏ともども泣いている。この頃、二人の仲は非常に良い。二人の仲がおかしくなるのは、次に語られる斎宮立后からである。

【38】夕霧の先生は大内記。古今集撰進時代の紀貫之の官職である。漢学に達者な者でなければ勤まらぬ職掌であることが、これで了解されよう。「いと痩せ瘦せなり。世のひが者にて、才のほどよりは用ゐられず、すぎなくて身貧しくなむありける」は、貫之のイメージであろうか。世のひが者、という点では明石入道を連想させるが。

【39】「爪じるし」という方法も面白い。不審な箇所に爪で印をつけておき、後考に備えるのである。本稿の名前もこれ

に拠っている。

【40】優秀な夕霧の成果を目の当たりにして、光源氏は、世代交代を意識している。「子のおとなぶるに、親の立ちかはり痴れゆく」。大宮に言った言葉「はかなき親にかしこき子のまさる例は、いとかたきこと」の「いとかたきこと」が実現した光源氏の感激は感激として、まだまだ自分は現役なのだという光源氏の意識が、時を忘れる六条院を生む心理的動機となっている、と考えられる。

【41】夕霧が寮試を受けるために「大学に参りたまふ日」には、「寮門に、上達部の御車ども数知らずとどひたり」という状況だったらしい。たかが寮試にこの有り様。光源氏の権勢をみせつける場面である。

【42】「昔おぼえて大学の栄ゆるころ」とある。「昔」とはいつごろのことであろうか。嵯峨天皇の頃か。あるいは奈良朝のことか。

【43】博士や才人たちが「所」を得、「すべて何ごとにつけても、道々の才のほどあらはるる世」となった。光源氏の時代は、王朝貴族の理想の世界という発想である。菅原道真がもし太宰府から復活し政権をとっていたら、という仮定が源氏物語上で現実化していると捉えるべきではあるまいか。【16】。

【44】話が政治へと転回する。この巻も、もう一つの話題は「政治」である。

【45】斎宮女御立后の一件は、どう考えても、光源氏のゴリ押し人事でしかない。先帝の内親王・藤壺、そして前坊の王女で

ある前齋宮と「源氏のうちしきり后にゐたまはむこと」は問題である。「弘徽殿の、まづ人より先に参りたまひしむいか」などと世の人が思うのも当然のことである。紅葉賀巻にみられた政治状況の再現。藤原氏の不満は内攻したものと推測される。この巻から早速に展開する両家の政治的対立の源は、ここに発する。それにしても、弘徽殿イメージは、源氏物語においてはよくない。この巻の終わり方に、弘徽殿太后に触れているのも意味深長である。

【46】藤壺の遺志を持ち出し、齋宮女御立后を強行した光源氏の行為は、安子の遺志を持ち出し大臣になった兼通に似ている。この中宮人事は、かなりスリリングなもので、余裕とはほど遠い光源氏の政治であったものと推察される。

【47】藤壺の兄で、長く兵部卿をやっていた宮。つまり紫上の父が、いま朝顔の父の後を継いで式部卿になり、宮家の最有力者となっているという事実。これに照らして、長期間式部卿でありつづけた朝顔の父の勢力と人望の程を、逆に推察することが可能である。そして、いまさらめくが、朝顔の世間的評価の重さも了解されよう。

【48】本来なら、世間的に見て、帝と一番血の繋がりの強い式部卿の娘・王女御が権力を得て、中宮になっても不思議ではない。本文も、そのところを意識して、王女御の記事にページ数を割いている。本来的にいえば、光源氏が一番血の繋がりが濃いのであるが、それは絶対の秘密であった。そこが、光源氏のアキレス腱であることを、読者が再確認する条である。帝が、

その秘密を知っているということが、光源氏の政治権力の源泉である。前々巻で、夜居僧の密奏が必要であった理由であろう。このことは、式部卿家にとっては、よもやのことである。したがって光源氏の行為は、藤原氏や式部卿家、そして貴族全体にとって、不可解以外のなにものでもなかったのではないか。「御幸ひの、かく引きかへすぐれたまへりけるを、世の人おどろききこゆ」。

【49】光源氏、太政大臣昇進。人臣最高位で、位人身を極めたわけである。彼の就任は、梅壺立后のバックアップだろう。右大将は内大臣になっている。いよいよ二人の時代が来たのである。そして対立も始まる。

【50】「韻塞には負けたまひしかど」と、こんなところで賢木巻の政治的屈辱時代のイメージを喚起しているのは、苦楽を共にして、今ようやくにして天下をとったという雰囲気醸成するためであろう。須磨で、若い日の内大臣が述べた補翼の発想もここにかかってくるものと思われる。(須磨巻)。

【51】内大臣は子沢山。「腹々に御子ども十余人」。次の世代では、必ずや光源氏を圧倒しそうである。が、こんなに大勢子宝に恵まれながら、女が二人しかない。これは、摂関体制下においては、致命的である。これでは、女一人の光源氏と五十歩百歩ではないか。彼はどこまでも、ついていない。

【52】雲居雁の母は「わかむどほり」で藤原氏ではない。皇女であった大宮が雲居雁を可愛がるのは、このせいもあるかと思われれる。

【53】その雲居雁の母の再婚先が「按察使の大納言」。按察使大納言への作者のこだわりは、どういう意味をもつのか。調べる必要がある。ところで、雲居雁の母は、どうして按察使大納言の妻となったのであろうか。内大臣に捨てられたのか。愛に走ったのか。内大臣が雲居雁を「女御にはこよなく思ひおとし」て

いたという事実から推測すると、彼女は内大臣に嫌われたものらしい。もし愛に走ったのだとすれば、幼い恋におちる雲居雁の前段として、一定の意味を持つといえる。次に出てくる玉鬘の母・夕顔、あるいは遠く宇治十帖の浮舟の母のように。と考えると、次の巻への心理的伏線となることが分かる。はたしてそこまで作者が計算しているかどうかは定かではない。

【54】その按察使大納言との間に子供が多く出来、雲居雁が継子扱いを受けるのがかわいそうだという理由で、母は大宮のもとに預けたという。なんだか紫上の初期の風景と似ている。雲居雁のヒロイン性の一つの要因だろう。

【55】夕霧と雲居雁は子供時代、大宮のところで一緒に育った。が、「おのおの十にあまりたまひてのちは、御方異」となる。桐壺巻で馴染みの風景である。

【56】光源氏と藤壺の筒井筒の恋の風景が描かれなかったのは、夕霧と雲居雁の幼い恋を描く、この巻とのバランスを考えたためではないか。これは、前巻で朝顔に朝顔を贈るシーンを、ようやく描いたのと同工異曲であらう。「はかなき花紅葉につけても」という記述など桐壺巻の記述を意識したもので、これはその暗示だと考えられる。

【57】「時雨うちして、萩の上風もただならぬ夕暮」とあるから、季節は、晩秋から初冬の頃となっていることが分かる。

【58】内大臣によれば、琵琶は、女性に似合わぬ楽器であるらしい。

【59】内大臣の証言。「太政大臣の、山里に籠め置きたまへる人」つまり明石御方は琵琶の名手。これは、若菜下巻、女楽の場面を睨んだ立言であらう。その場面で、明石御方は琵琶を担当している。また、「ものの上手の中にははべれど、末になりて、山がつにて年経たる人」という言葉よりすると、明石一族の過去の栄光について、内大臣もいささか承知していることがうかがえる。言葉にやや刺があるのは、現在の彼の政治的不満のなせる業であらう。

【60】明石御方が、光源氏唯一の女子を生み、その女子が今、紫上のもとで育てられていることは、世間の常識であったと見える。大宮の言葉から、それがうかがえる。なお、大宮は紫上のことを「やむごとなき」と述べている。明石御方に比較すれば、そうだということか。あるいは、心底そう思っているのか。朝顔の女五宮との対比で理解するとすると、比較論が正しいか。【61】「遊びのかたの才はなほ広うあはせ、これかれにかよはしはべるこそ、かしこけれ」。内大臣の音楽論。独学への懸念。スペシャリストよりゼネラリスト。光源氏の教育論と共鳴する。【19】。

【62】光源氏の現在を「老の世」だと大宮は言っている。子供を作る年齢という発想からすれば、もはや光源氏は晩年だとい

うことか。

【63】大宮と内大臣との明石御方礼讃。大宮は、姫君を手放し「やむごとなき」紫上に差し出した点を評価し、内大臣も「女はただ心ばせによりこそ、世に用ゐらるるものにはべりけれ」と、明石御方の「心ばせ」を褒めている。これは、巻末にある、明石御方の六条院移りの正当性を示すための環境作りなのかもしれない。また、この巻で語られた教育論が明石姫君の教育論に連動していることについてはすでに触れた。読者の意識から、明石姫君を放さない処置だということは留意すべき事項である。

【64】内大臣の不満。【45】からの発展。「思はぬ人におされぬ宿世になむ、世は思ひのほかなるものと思ひはべりぬる」。この藤原氏の、いわば暗黒地代は、宇多帝から醍醐帝にかけての時代が思い出される。「故大臣」が存命であったなら、「かくもてひがむることなからまし」という大宮の言葉は、事態を正確に言い当てている。さしずめ故太政大臣は権勢を誇った基経のイメージであろう。基経は、物狂いの帝・陽成天皇を解雇した実力者であった。彼が基経に相当する人物であるのなら、桐壺帝の妹である大宮と結婚しても決しておかしくはない。内大臣は、不調に終わった弘徽殿女御にかわり、東宮妃としてこの雲居雁を予定し、捲土重来を期しているものと思われる。大宮は言っている。「この家にさる筋の人出でものしたまでは止むやうあらじ」。しかし、光源氏方には、東宮妃として明石姫君が着々と成長している。彼自身が予測するように、内大臣の敗北は今から決定的である。

【65】内大臣が、やって来た夕霧にかけた言葉、「才のほどよりあまりぬるもあじきなきわざと、大臣もおぼし知れることなるを」は、絵合巻を意識した言葉であろう。

【66】管弦の遊びにもらした内大臣の思い。「大殿も、かやうの御遊びに心とどめたまひて、いそがしき御政治どもをばのがれたまふなりけり。げに、あぢきなき世に、心のゆくわざをしてこそ、過ぐしはべりなまほしけれ」。光源氏が、この巻の末で六条院を造る動機の説明になっている。が、内大臣の心理に則してこのあたりをたどると、「落葉が微風によって散る」だの「更衣せむや」という歌詞をもつ「萩が花ずり」だの、なんだか、うら悲しい。

【67】内大臣の不満は、どこかで発散されなければ、おさまりがつかないところとなっていたのである。たまたまそこに、夕霧と雲居雁の一件があったわけである。なにも知らない無垢な子供が親たちの政治にまきこまれた図柄である。この件に関する「なかさしもあまべき」という大宮の、内大臣に対する不満が、内大臣の異常さをよく示している。女房の噂をとらえて大騒ぎする内大臣は、賢木巻の右大臣に似ている。

【68】もっとも、内大臣の身になってみれば、なけなしの娘である雲居雁を、光源氏の息子に取られて、東宮入内の夢を碎かれたわけであり、女御立后失敗とあいまって恨み晴らさでおくものか、という心境になっても不思議ではない。【64】。

【69】内大臣の帰途の思い。夕霧と雲居雁の結婚自体は悪いことではない。「めづらしげなきあはひに世人も思ひ言ふべきこ

と」が問題なのだ。「めづらしげなきあはひ」ということであれば、紫上と光源氏の結婚も、ずるずるといったもので、この若い二人と大差ない。このことは、後、女三宮の結婚の時、紫上の心理的負い目となっている。それから逆に考えると、この内大臣の心情は理解されよう。なお、いわずもがなだが、この紫上の心理的負い目は、前巻で覚醒し、ここでさらに強調され、若菜巻への繋ぎとなっていることを忘れるべきではない。

【70】この、夕霧と雲居雁とのだらしない一件は、大きく見れば、猫可愛がりをした大宮の教育の失敗例として見る事ができる。この風景の奥に、紫上による明石姫君の教育が行われているわけで、こういう失敗とは無縁であるという暗示効果を催す。それだけで、この条はよかったのかもしれない。

【71】尼は化粧をしない。というのは嘘である。現に、出家している大宮は、「化粧じたまへる御顔」と書いてある。

【72】内大臣の不満点。「ゆかりむつび」。親戚どうしの結婚は、「ねじけがましきさま」であるということ。

【73】「かやうのことは、限りなき帝の御いつき女も、おのづからあやまつ例、昔物語にもあめれど」という女房たちの言葉は、源氏物語のテーマの補強だろう。こういう話は、当時結構あった。しかし、帝の后が過ちを犯し、その子が帝になるという話つまり『源氏物語』のごとき構想は、想像の外であったものと思われる。

【74】内大臣の怒りに調子を合わせた答えをする女房たちが面白い。「めでたきにて、ただ人の筋は何のめづらしさにか思

ひたまへかけむ」。世の常でない、ただならぬ人こそが価値ある人なのである。

【75】夕霧と雲居雁の結婚を、むしろ進める側に立つ大宮の考えは、かつて東宮の懇望を拒み、臣下にすぎない光源氏に娘を与えた左大臣の発想と同じである。あの時、大宮は、左大臣と心を合わせて行動したのであろうことが、今更ながら想像される。あるいは、大宮の意思の方が強かったのではないかとさえ思われるかどうか。大宮は、雲居雁より「男君の御かなしさはすぐれたまふ」と本文にある。

【76】大宮に注意された時の夕霧の言い訳。「何ごとかはべらむ。静かなる所に籠りはべりにしのち、ともかくも人にまじるをりなければ、恨みたまふべきことはべらじとなむ思ひたまふる」。夕霧にとって、雲居雁と過ごす時間は、苦しい勉学の合間の、心やすまる時であったのかもしれない。

【77】「雲居雁もわがごとや」という夕霧の独り言が、雲居雁の名前の由来となった。彼女は、近くに夕霧がいることを知り、夕霧に聞こえるようにつぶやいたのではないか。

【78】夕霧と雲居雁との仲をとりもったのは、雲居雁の乳母子・小侍従であったことが分かる。王命婦の例から知られる通り、乳母子は主人と一心同体。誰よりも主人の意思に忠実である。一方、乳母子の母である乳母のほうは、当たり前の話だが、雇い主の意思に忠実である。現在では、さすがに乳母子も、雇い主の内大臣の方に従わざるをえない状況である。

【79】内大臣の北方が、ちょっと出てくる。内大臣はこの件を、

北方とは相談せず、自分の意志でとりおこなったらしい。このことは、逆に、彼の行為を純化し真剣さを印象づけよう。朝顔の時の光源氏の行為と同じである。意識的操作かもしれない。

【80】中宮人事の不満から、弘徽殿女御を里邸に引き上げさせる内大臣は、詮子を東三条院につれもどした、かつての兼家をおぼせる書きっぷりである。兼通や兼家のイメージの援用は、このあたりを非常に政治的色彩で彩っている。(46)。

【81】内大臣の「君達」が列挙されている。「左少将、少納言、兵衛の佐、侍従、大夫」の五人。光源氏の子供の少なさと対象的である。見るに現在はいしたことはない。が、将来は脅威であろう。「左少将」は柏木のことか。少納言が、紅梅巻の主人公となる大納言のことだろうか。なお、「左衛門の督、権中納言」は、内大臣の弟であろう。彼らはそれなりに出世している。かれらの子供たちも大勢になっているらしい。藤原氏の現状がはからずも示されている箇所だ。

【82】内大臣の本心が書かれている。将来は、事の推移をよく見極めて、許せるものなら許してやろう。今は、このままにしておくと、「一所にては、幼き心のままに、見苦しうこそあらめ、宮も、よもあながちに制したまふこともあらじ」。これもまた、内大臣の教育論なのである。教育における甘えの排除。光源氏の教育論の援護論になっていることに注意したい。

【83】雲居雁は、この時十四歳。藤壺が光源氏に深入りをしたのもこのころであったのではあるまいか。この巻も、大きな視点からすれば、藤壺追悼の一環として捉える必要がある。今の

大宮は、当時の桐壺帝の立場と考えてほぼ間違いのないのではないか。桐壺帝も、今の太宮のようであったからこそ、光源氏と藤壺の間違いが起こったのであるという視点が重要である。

【84】太宮は雲居雁に「残りすくなき歳のほどにて、御ありさまを見果つまじきこと、命をこそ思ひつれ」と言うが、これは予言となる。雲居雁は、この日が太宮との最期の別れとなるのだし、太宮も、夕霧と雲居雁の結婚を見届けるまで生きてはいない。(藤裏葉巻)。人生の残酷さがよく出た場面だ。

【85】別れに際して、夕霧の乳母「宰相の君」が雲居雁に言った言葉は露骨でおもしろい。「殿はことさまにおぼしなることおはしますとも、さやうにおぼしなびかせたまふな」。彼女は夕霧と読者の心中の代弁者である。なお、この宰相君は、父親が参議であったからこう呼ばれているはずで、乳母としては破格である。明石姫君の乳母と同じレベルの人が、夕霧の乳母として配されていることが分かる。光源氏の配慮の一端が知れよう。

【86】宰相君の手配で、最後の対面を果たした夕霧と雲居雁。「まろも、さこそあらめ」と言い、「恋しとはおぼしなむや」という夕霧の問いに頷く雲居雁。「もろ恋」のよい場面だ。

【87】二人の対面を知り、怒り心頭に発した雲居雁の乳母の思い。夕霧の乳母と同じく露骨。「もののはじめの六位宿世」は内大臣の代弁か。彼女は、この瞬間から敵役となる。こういう乳母が側にいるのだから、夕霧と雲居雁の将来はけっして樂觀はゆるされないのである。

【88】乳母の厭味を聞いた夕霧が詠んだ歌。「くれなゐの涙に深き袖の色をあさみどりと言ひしをるべき」は傑作である。夕霧はこの心をバネにして強く生きていくのではないかと想像される。

【89】東院の自室に帰る夕霧。「霜氷うたてむすべる明けぐれの空かきくらし降る涙かな」も、素直ないい歌である。「明けぐれ」は、作者の好きな言葉とみえる。

【90】十一月、五節の場面がかなり長大である。これは名実ともに藤壺の喪があけたことを示す区切りの華やかな場面であろう。「過ぎにし年、五節などともれりしが」がそのあたりの事情を語っている。これ以前は、藤壺の名残と考えておいたほうがよいのではないか。一周忌の喪があけてはいるが、筒井筒の恋も、心理的にはそうである。

【91】この年の新嘗祭の五節舞姫を光源氏が出す。というのだから、特別に豪華な五節である。舞姫は、新嘗祭の場合は四人。公卿から二人、殿上人・受領から二人。大嘗会の場合は五人。殿上人・受領から三人出るのである。五節とは五つの節会のこと。元日節会（一月一日）、白馬節会（一月七日）、踏歌節会（一月十六日）、端午節会（五月五日）、豊明節会（十一月中辰日）。本来、三月三日（曲水宴）と七月七日も節会であったのだが、平城天皇の時代に廃止され、五節となっている。特に、豊明節会が盛大で、五節といえはそれを指すようになったわけである。

【92】本来舞姫は公卿から二人なのだが、今年は三人だったら

しい。異例である。「按察使の大納言、左衛門の督」それぞれ娘。それに光源氏。光源氏は、惟光の娘をさしだしたのである。光源氏の言によれば、大納言は「外腹の女」つまり正妻の娘でない娘をさしだしたらしい。内大臣の弟である左衛門督は、他人の子を差し出したことが発覚し、問題になっている。舞姫は、そのまま宮仕えに召される可能性が高かったらしい。ので、いろいろな心理規制が出す側にはたらいだものと推察される。

【93】良清は近江守で左中弁、惟光は摂津守で左京の大夫。いづれも出世して受領階級となっている。そして、彼等も父親となり、娘を五節の舞姫にだすような年令となっているのである。世代交代の印象が強い。光源氏の息子の恋の場面の後だけに余計にその思いを強くする。「世代交代」は、この巻のキーワードであろう。

【94】光源氏が、夕霧を、紫上のいる「御簾の前にだに、もの近うもてなしたまわず」「うとうとし」くあつかっていたという記事は、内大臣の不用意さとの対照である。これは経験の差でもある。が、野分巻への布石ともなっている個所で、注目に値する。これが、夕霧と紫上の関与の最初の記事である。

【95】夕霧が惟光の娘を発見し、心を動かす場面。【94】の記事の後に置かれてるだけに、光源氏とその昔、藤壺を求めて臘月夜を発見した構成を思い出す。（花宴巻）。惟光女は美貌の人である。また、この場面は、かつて光源氏が筑紫の五節に出会った場面をだぶらせていることは明らかである。

【96】光源氏が参内し、舞姫を見る。そして「昔御目とまりた

まひし少女の姿をおぼし出づ」という展開は自然である。過去と現代が二重写しになって、惟光女の背景として筑紫の五節がやっとここで姿を現す。そして彼女の出番はこれっきりである。彼女は光源氏を待ち、光源氏を思つて人生を終える女なのである。(花散里巻、須磨巻、明石巻、滯標巻)。幻巻で光源氏はちょっと彼女のことを思い出してはいる。報われることのない愛に生きた女。身分からいえば明石上、愛の面からいえば花散里の影となる女であろう。雄略天皇の三輪山の少女・赤猪子の話の影響もあるかもしれない。

【97】筑紫五節は朝顔からの連続。昔懐かしい人。「かけて言へば今日のことと思はゆる」。時は変わり、昔は遠くなっているのである。「日蔭の霜の袖にとけしも」。源氏物語の「日蔭の女」。

【98】美貌の惟光の娘は典侍になる予定。源典侍も、その昔こういう女であったものと推定される。前巻に源典侍が出てくるだけに、この挿話は効果的である。

【99】童殿上の兄を使者にして、夕霧が惟光の娘に手紙をやる場面。これは、かつて光源氏が筑紫五節に手紙をやった場面の再現にちがひあるまい。筑紫五節も美貌の人であったと推測される。世代交代の印象を決定的なものとするシーンではないか。

【100】夕霧の歌。「ひかげにもしるかりけめやをとめ子が天の羽袖にかけし心は」は、五節の起源をイメージさせる歌である。

その昔、天武天皇が吉野で琴を弾いたとき、五人の天女が降りてきて舞をまっした。これが五節の舞だという伝説。

【101】惟光の証言。光源氏は「見そめたまひてむ人を、御心とは忘れたまふまじきにこそ、いとたのもしけれ」。光源氏の人生は、相手の女を自分の方からは決して忘れない人生なのだ。惟光は言っている。筑紫の五節の場合はどうかと言つてやりたいう気持ちがある。

【102】惟光が「明石入道の例にやならまし」と言つたところ。明石上が受領階級の夢としてすでに確立していることの証明である。惟光が、これを口にできるまでに出世しているということでもあろう。作者はここでも、明石姫君の教育が確実に進行していることを匂わしている。読者への注意の喚起、作者のつつきである。

【103】「大宮の御世の残りすくなげなるを、おはせずなりなむのちも、かく幼きほどより見ならして、後見おぼせ」と光源氏に言われて夕霧の世話係になる花散里。「ただのたまふままの御心」とある。彼女は、光源氏の言葉に決してさからわない。従順な女なのである。かばかりの宿世。彼女は、そう人生を達観している女なのだ。

【104】夕霧の証言。花散里は「容貌のまほならずもおはしける」人。「心ばへのかうようにやはらかならむ人をこそあひ思はめ」。彼女は醜女。人柄のみでもつ女。惟光女的美貌を強調した後だけに花散里の不具合は目立つ。大宮、雲居雁も美人。夕霧は「ここにもかしこにも、人は容貌よきものと目馴れ」ている男なのだから、花散里の容貌はショックだったと思う。作者の弁護「もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたるこ

ちして、痩せ瘦せに御髪少なるが、かくそらはしきなりけり」

は、弁護になっていない。花散里をここでこのように扱っているのは何故か。落ち込んでゐる夕霧を励ますためか。人生の意味を考えさせる教育的配慮のためなのか。ならば、この巻における光源氏の教育論の実例として花散里を捉えなおす必要がある。『呂氏春秋』孝行覽・遇合に、黄帝に氣にいられた醜女・莫母の話がある。花散里は、まさにこれだろうか。

【105】夕霧を激励する大宮。「男は、くちをしき際の人だに、心を高くこそつかふなれ。あまりしめやかに、かくなものしたまひそ」。

【106】年末の夕霧と大宮の語らいの意味あいは大きいと思う。「母におくる人は、ほどほどにつけて、さのみこそはあはれ」。これでもって、中将時代以前の光源氏の心理が回復される。この時大宮は、全く桐壺更衣の母、あるいは桐壺帝その人である。ここで、これを書くために作者は、光源氏の、母なき子の哀れな様を省略したものと推察される。

【107】大宮の感慨。「昔にかはることのみまさりゆくに、命長さもつらめしき」。世代交代。彼女の命も、光源氏がいうように、ながくはもちそうにない。【108】。

【108】正月を「良房の大臣」のように過ごす光源氏はほとんど天皇である。「白馬ひき、節会の日々、内裏の儀式をうつして」とある。ここで、作者は、かってほとんど天皇であった藤原良房の栄耀栄華を源氏に転換している。藤原の源氏化である。こうして、本来の藤原は衰亡させる。という道筋を作者は企図し

ているのではないか。

【109】二月二十日余り。朱雀院の行幸。これも、昔懐かしい響きがある。あれは桐壺時代最大の行事であった。光源氏が青海波を舞った日である。が、これは季節からして、紅葉賀というより「昔の花の宴のほどおぼし出でて」とあるごとく、花宴巻と照応する構成ではある。少しずらしてあるわけだ。光源氏の歌に注目したい。「鶯のさへずる声は昔にてむつれし花の蔭ぞかはれる」。「世代交代」。この巻のテーマはまさにこれであろう。

【110】帝と光源氏が同じ「赤色の御衣」を召している。「いよいよひとつものとかがやきて見えまがはせたまふ」とある。罪の実在である。光源氏が天皇待遇となっている現在では、しかし、罪を乗り越えてしまった感が強い。これを朱雀院および弘徽殿太后に見せつける。意図はなくても、結果的にそうになっている。しかし、これがこのまま許されつづけるのか。予断を許さない。

【111】放鳥の試みは面白い。

【112】帥宮は現在、兵部卿となっている。

【113】大御遊び。光源氏、朱雀院、兵部卿、冷泉帝の和歌。そして音楽。兵部卿・琵琶。内大臣は得意の和琴。朱雀院は箏の琴。琴（きん）は、「例の太政大臣賜はりたまふ」。光源氏と琴とは分かちがたく結合していることが知れよう。もう弾ける人が光源氏一人となっているということか。光源氏は琴にこだわっているのだと考えたほうがよい。若菜巻の女樂の場面に接続する場面であろう。女三宮事件への細流でもある。

【114】弘徽殿太后を訪れた光源氏と帝。太后は朱雀院に引き取られている。彼女の胸はいまだに騒いでいるけれども、敗北は歴然たるものがある。一つの時代が終わり、光源氏の勝利の物語はここに完結したとみるべきであろう。これも世代交代。

【115】同じく朱雀院にいる臘月夜と光源氏との関係はまだ切れていない。これも、若菜巻への細流となる。

【116】夕霧が当日の詩の出来ばえで進士となる。放鳥の試みに成功したわけである。【117】。そして、その年の秋に「かうぶり得て、侍従」になる。六位からの脱出である。約五ヶ月の艱難辛苦であったわけである。雲居雁との一件は、「消息ばかり」で、依然がかばかしくない。

【117】夕霧が五位になったのが、秋の除目。次に「年かへりては」とある。その年の八月に六条院が完成している。前年二月の朱雀院行幸からこの年の八月まで、ほとんど一年半が省略されている。この間、六条院プロジェクトが進行していたものと考えられる。光源氏も、忙殺されて暇がなかったものと推察される。

【118】六条院の造宮。光源氏の政治的実力に相応しい住まいである。二条院では手狭になったのである。二条院は母の里。桐壺族のシンボルであったと考え、それをはるかに越えた世界の開始と六条院造宮を位置づけることが可能である。

【119】本文に「六条京極のわたりに、中宮の御古き宮のほとりを、四町を占めて造らせたまふ」とあるから、六条御息所の家をとりこむかたちで、光源氏は六条院を造ったことが知れる。

例の夕顔を死なせた某院もその中に含まれるに違いない。あれは、桐壺族の夢の跡と読めた。今、光源氏は過去の夢を、さらに拡大して復活させるわけである。（夕顔巻）。

【120】六条院の位置・規模からして、これが源融の六条河原院の面影を宿すのはいたしかたなからう。作者は、天皇になりたくて天皇になれず、しかたなく天皇のように生きた融のイメージを援用して光源氏の栄華を語っているものと考えられる。そして、河原院が海をもつ結構であったという事実も、源氏物語上においては重大な意味がある。龍宮の「夜光る玉」と松風巻で表現された明石姫君が生活する場として、河原院の海のイメージは、まさに絶妙の設定であったと考えることができるからである。

【121】光源氏が六条院を造宮した一つの理由として、紫上が父式部卿の五十賀を祝うための場所の必要をあげている。このことは、紫上が六条院の主宰者であるということの意味する。これは、朝顔巻でぐらついた紫上にたいする補強工作であろう。

【122】新年。朱雀院行幸が春だから、相当の省略がある。【117】。

【123】光源氏が、紫上の実家である式部卿家に冷たかったことは、これまで記されていた。今ここで、式部卿本人の胸の内を書き、実証している。「あやにくに情なく、事に触れてはしたなめ、宮人をも用意なく、愁はしきことのみ多かる」とあるところを見ると、光源氏の式部卿家にたいする冷遇は露骨なものであったと知れる。今、掌を返したように五十賀を「響かしいとなみたまふ」のは、どういう風のふきまわしか。式部卿は素

直によるこんでいるが、北方は「心ゆかず、ものし」と思っている。こちらの方が納得できる反応である。

【124】光源氏冷遇の原因を式部卿は「つらしと思ひ置きたまふことこそはありけめ」と了解している。光源氏逆境の時、在京の紫上に冷たかったことにたいする報復なのだというのを、式部卿は自覚しているのである。

【125】一方、式部卿北の方は「心ゆかず、ものしとのみ」思っている。先頃入内した王女御に対する光源氏の「御用意」のなさを不満に思っているのである。なぜ、王女御を中宮にしなかったのか。北方の恨み、反発は弘徽殿太后からの連続で理解すべきであろう。反光源氏派の拠点がもう一つあったのだ。それが紫上の身内に存在しているという事実がポイントである。朝顔に発し真木柱を経由して若菜巻の破壊へと進んでゆく、これも細流の一つ。

【126】六条院の完成は八月。およそ一年かかっている。内裏造管とはおなじ期間であることに注意したい。光源氏は、いまやほとんど天皇なのである。（108）。

【127】未申の町が中宮。ここはもともと六条御息所邸であったから当然の配置。辰巳は光源氏と紫上、明石姫君。ここが正殿なのだ。丑寅が花散里。この方角は鬼門。内裏に対する比叡山延暦寺の位置に相当する。魔除けではないか。彼女を醜女にしているのも理由なしとしない。戌亥が明石御方。私は、こここそ、夕顔巻の某院なのだと推定する。かつての本丸。若き日の明石入道がいた場所であったはずである。

【128】「もとよりありける池山をも、便なき所なるをば崩しかへて」という記述より、どうも六条院は、夕顔巻の某院の地所であった気がする。そう思わぬか。

【129】南東の紫上と明石姫君が春。南西の中宮が秋。北東の花散里が夏。北西の明石御方が冬。方位からいってもこの配置は納得のいくものだし、南西にむかって傾斜している京都の地形からいっても、花散里のところに「涼しげなる泉」を置いて水源としているのも、理に合った配置である。

【130】六条院に四季があるということは、六条院が完結した小宇宙であるということの意味しよう。浮世離れた「静かなる御住ひ」なのである。いかなれば、光源氏の神仙郷、もったいえば、都における龍宮である。龍宮には四季の庭をもつ部屋がある。龍宮だとすれば、明石一族が住むに相応しい場所ということになる。これが、そもそもメインの発想だろう。

【131】引越しは秋の「彼岸のころほひ」。第一陣は、紫上と花散里。花散里が紫上の影的存在であることをよく示す条である。【132】第二陣は秋好中宮。紫上より五六日の後れ。行啓であるから、大層なものであったと想像される。が、本文は省略されている。

【133】九月、秋の中宮の季節。中宮と、春の紫上との贈答は、春秋の論めいて面白い。この贈答は、紫上の格上げの意味あいもある。紫上は春を受け持つことによって、中宮と横に並ぶのである。薄雲巻からの連続性に留意すべきであろう。

【134】中宮からの紅葉の消息を見た光源氏のアドバイス。「春の

花ざかりに、この御いらへは聞こえたまへ」。豪華な胡蝶巻の予告である。

【135】第三陣は明石御方。「大井の御方」と呼んでいる。兼明親王のイメージを借り、やんごとなき雰囲気をかもしだしていることに注意しようではないか。十月。ついに大井の彼女は、六条院の主として都に入ってきた。明石入道生涯の夢は、かくして第一歩を踏み出したのである。また、この六条院が、融の河原院のイメージを持つかぎり、六条院の池は池ではなくて、「海」である。海のある場所に、明石御方が入るということは、まさに「海龍王の後となるべきいつき娘」の面目躍如たるものである。これは何度言っても言い足りることはない。

【136】龍宮城には四季がある。という発想が『栄華物語』にある。紫式部は、おそらくは、この発想を六条院にとりこんでいると思う。【130】。

【137】六条院世界の開始は、新しい時代の開始。光源氏と紫上、そして明石姫君の新時代の開始である。藤壺の時代はここに完全に終了したと知れよう。

玉 鬘 卷

【1】「飽かざりし夕顔」は、未摘花巻の発想と同じである。光源氏にとって、夕顔は見果てぬ夢であったということが、いまさらながら確認される。あれから十七年の歳月が経過している。

朝顔巻からの連続性を考えれば、光源氏が若い日の夢を追う心理は自然な展開であろう。

【2】右近の存在が、夕顔をここまで引きずる作用をしている。「右近は、何の人数ならねど、なほその形見と見たまひて、らうたきものにおぼしたれば、古人の数につかうまつり馴れたり」。光源氏の面倒見のよさ「御心長さ」である。そういう男の少なかった当時において、こういう設定は光源氏の人気の源泉でもある。

【3】右近は、最初光源氏付きの女房であったが、須磨事件の際、紫上の許に預けられた。以来、紫上のところにいる。紫上に心服した女房の一人となっているわけである。

【4】もし夕顔が生きていたら、明石御方ぐらいには遇されていたはずである。今回の六条院移りに漏れることはなかったはずだ。という右近の思いが書かれている。これは、これから登場する玉鬘を、明石御方との相対の視座でもって眺めるということの意味しよう。ということは、この巻が、明石一族の物語の一環として位置づけられるということでもある。後で触れるが、玉鬘に対する光源氏の言説が、描かれない明石姫君に対する言説のヒントとなって、明石姫君教育の実態を暗示することになるという関係にも着目しよう。

【5】「西の京にとまりし若君」つまり玉鬘を、右近は夕顔の事件の後尋ねなかったらしい。それは、光源氏の名誉のためであった。「わが名もらすな」。かくて、夕顔事件は迷宮入りとなり、いうなれば光源氏の完全犯罪となった。今や、夕顔事件は

時効の感覚となっているのかもしれない。

【6】玉鬘の乳母の夫が「少貳」になる。そして、任地に赴任する。以後、つい最近までかの地にいた。ということとは、筑紫五節の父・大貳の配下にあったことになる。これは、光源氏が須磨に行ったあたりで、本来は帰京する予定であったという位置取りであろうか。玉鬘の年齢設定から逆算して、ほぼその見当になるのではないかと推測される。

【7】玉鬘は四歳より二十歳まで京都を離れ、北九州の地で過ごす。二十二歳まで明石にいた明石御方とはぼ一緒に運命である。そして、玉鬘の運命の方が過激な分だけ明石御方が救われるという仕掛けであろう。（4）。

【8】北九州・筑紫を選んだ意味はどう考えるべきか。夕顔と檜垣姫との類同性については、夕顔巻で指摘した。檜垣姫とのからみで理解すべき事項なのかもしれない。

【9】「ことなるしつらひなき船に」玉鬘を「乗せて漕ぎ出づる」とある。当時の下級役人の赴任の様子をかいまみせる記述である。

【10】「船人もたれを恋ふとか大島のうらがなしげに声の聞こゆる」の大島は、瀬戸内海の出口に位置する山口県大島郡の屋代島のことでないかと思うが、いかが。「遠く来にけるかな」の実感にあっていると思う。

【11】乳母が見た夢。夕顔の側に立っていた「同じさまなる女」とは何者か。某院の物怪か。夕顔と同じさまなる女、と解釈すると、夕顔巻の物怪は六条御息所ではないことが、ここで証明

されることになる。賢木巻の年齢を信ずれば、六条御息所は、夕顔より五歳くらい年上。身分は明らかに違う。もともと、あの物怪は、某院についていた物怪であると夕顔巻で設定されていたのだから、ここでこう書いてあっても不思議はない。

【12】任期満了にもかかわらず帰京不能に陥った少貳。当時こういった例は結構あったものとみえる。この事例は、これより高級貴族であるが、そのままの土着化してしまった明石入道の事情をちらつかせる展開であろう。（4）。「ことなる勢なき」少貳レベルともなれば、よく陥りがちなことであったのではないか。後に「娘どもも男子どもも、所につけたるよすがでも出で来て、住みつきにたり」とある。

【13】「この君十ばかりにもなりたまへる」。玉鬘と光源氏との年齢差は、およそ十五歳である。光源氏二十五歳という年は、臘月夜との一件が発覚して進退窮まった年である。こゝは、賢木巻のあたりの時点に相当する。

【14】現地で死ぬことになった少貳の遺言。遺言の重みは、源氏物語ではつとに強調されるところである。したがって「この姫君、京に率てたてまつるべきことを思へ」という少貳の遺言は、近々実現しそうである。子供たちにきつくい渡したところ、空蟬の世話を頼んだ常陸介にさも似ている。（閑屋巻）。

【15】少貳は、この国の人とは折り合いが悪かったらしい。悪政の故か、あるいは善政の故か。後者のような気がする。ならば、当時の例に照らせば稀な事例といえる。悪政の限りを尽くしたのなら、上京費用に事欠くような事態にはならなかったは

ずである。大式とも、対立する場面もあったのではないか。後
の大夫監の証言によれば「故少貳のいと情けで、きらきらしく
ものしたまひしを」とある。

【16】玉鬘は「ねびととのひたまふまに、母君よりもまさり
てきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くつくしげ」
で「心ばせおほどかにあらまほし」い女に成長している。夕顔
より美人で、しかも利発。これは、六条院に入る資格十分な女
性であるという宣言であらう。右近の夢は、まもなく叶いそう
である。〔4〕。

【17】田舎では貴種はやたらありがたがられる存在であつたら
しい。地方の実情に詳しい作者らしい話の展開である。近い将
来出現する、貴種を棟梁に預いて天下に進出する武士の時代の
内実を、この記事は、はからずも示す結果になっている。

【18】玉鬘は美人だけれども「かたは」だという逆宣伝。どこ
に欠陥があると言ったのか。小町の俗説のようなことを考えれ
ばよいのか。やや気にかかる。

【19】「父大臣」と軽く書いてくれるが、玉鬘の父が内大臣に就
任したのは、少女の巻の初年。つまり六条院完成年の三年前で
ある。玉鬘の年齢でいえば、十七才ぐらいの年である。作者と
しては、少女巻の次で、こう書きやすかったということだろう。
厳密に言えば、ここでこう書いていいかどうか微妙な問題では
ある。

【20】「年三」（ねさう）とは珍しい。古注にいう、正月五月九
月の仏事と星祭りのことか。帝釈天関係を考えると、二つは結

びつくのではないかと思うが、なお、調査を要する。

【21】「二十ばかりになりたまふまに」。これは、玉鬘が母・
夕顔の年齢に達したということである。彼女の空白の年代、つ
まり北九州に封印された時代は、玉鬘が夕顔になるための秘儀
ともいふべき空間なのだと思ふ。玉鬘は、夕顔巻
で途切れた夕顔の時間を繋ぐ存在なのではないか。この時、二
十という年齢がそのキーワードとなる。光源氏の心理に則して
言えば、彼はまもなく、玉鬘という夕顔の忘れ形見に遇うので
はなく、心理的にいえば、夕顔本人に出会うことになるのであ
る。過去の再現である。これは、過去でありながら過去でなかつ
た朝顔とは、一味違った構想であらう。が、これとて、心理的
にいえば、同じ発想にちがいない。その意味では、この巻が朝
顔巻に心理的に連続することになり、玉鬘登場の不自然さは随
分と解消される。さらに言えば、世代交代の描かれていた少女
巻の次に玉鬘が登場することは、絶妙の構成といえよう。

【22】玉鬘たちは肥前に住んでいる。なぜ肥前なのか。九州の
なかでの都落ち、というイメージが必要であつたためか。ある
いは、先刻指摘した檜垣姫のイメージの補強か。『袋草紙』に
は「肥後国遊君檜垣姫」とある。それならば、清原元輔との結
婚、清少納言の母などという風説が紫式部の頃成立していたの
だろうか。〔8〕。

【23】大夫の監の存在。これに睨まれたら、このあたりでは暮
らしてゆけないという実力者。中央政府の力の及ばぬ「富豪」
の存在を作者は承知していたものと知れる。明石入道をさらに

強大化したものとしての位置づけだろう。都から遠ざかれば遠ざかるほど、その距離に見合った反中央政府的人物が存在する。「国のうちの仏神は、おのれになむ靡きたまへる」。村上王朝時代の藤原純友、平将門などを念頭においた発想であろう。あな

どれぬ田舎の存在が、源氏物語にもしっかり記されているのである。これは、これから展開される王朝貴族世界の精華である光源氏の六条院をも相対化せずにはおかない構想である。「容貌ある女を集めて見む」。この田舎の光源氏的事实を読者にしっかり認識させようとするのが、作者の魂胆ではないか。

【24】大夫の監は、「肥後の国に族広く」とあるから、肥後国の大豪族である。これが肥前の国の玉鬘のところに来たわけである。辺境の蛮族の襲来めいておもしろい。少弐の息子二人が、彼の勢力下にはいつているところをみると、大夫の監の勢力は九州一円におよぶレベルのものであったと想像される。地方豪族の実態をかいまみせる記述だろう。『平家物語』巻第八「緒環」に豊後国の豪族緒方三郎惟義の五代前の先祖「あかがり大太」の話がある。これに準じて大夫の監は理解しておけばよいだろう。

【25】大夫の監の走狗となった少弐の息子二人が、玉鬘と大夫の監との結婚を勧める言葉「さるべきにてこそは、かかる世界にもおはしましけめ」は面白い。これでは、まったく明石入道のパロディではないか。

【26】遺言を守る兄・豊後介。源氏物語的人物である。（14）。彼が豊後介になったのはいつか。少弐の死後に任命されたのか。

ならば、ますます土着化に拍車がかかったものと推察される。（12）。それにしても、肥前に住んでいることとの関連はどうなるのか。彼は、もう豊後介ではないのか。

【27】大夫の監の描写。徹底して、田舎者を馬鹿にする視点でもって貫かれている。が、細部に注目すると、無視できない点がかなりある。玉鬘と結婚したら「私の君」と思う。これは、空蟬と結婚した伊予介の感情と同じである。（帚木巻）。数多くの女を囲っている。これは、ミニ六条院の趣である。さしずめ言えば、大夫の監は「田舎の光源氏」なのだ。「なにがしら、田舎びたりといふ名こそはべれ、くちをしき民にははべらず。都の人とても、何ばかりかあらむ。みな知りてはべり。なおほしあなづりそ」という自信。これは陳涉的自信である。「王侯将相寧有種乎」。端倪すべからざるものではないか。「国のうちの仏神は、おのれになむ靡きたまへる」。紫式部は、こういう地方の侮りがたい実力、『史記』や『今昔物語』の世界を充分に意識して源氏物語を描いているのだと考えたい。

【28】「わが君をば、後の位におとしたてまつらじものをや」。なんだか更級日記の「後の位もなにかはせむ」を思い出させるではないか。あれも、田舎くさい発想ということか。

【29】「天下に目つぶれ、足折れたまへりとも、なにがしはつかうまつりやめてむ」は、田舎における貴種信仰の物凄さを示している。（17）。

【30】「あてきといひし」は不審。前に出てきた人物のような書き振りである。夕顔関係には見えなかった人物である。葵巻に

「あてき」という女童がいたことを読者は覚えていたのだろうか。可愛い子供のことを「ばくちゃん」というが、それに相当する語だと考えれば、あまりこだわることもないのかもしれない。今は成人して「兵部の君」といつているわけである。

【31】四月二十日近く。玉鬘一行の九州脱出は、完全な夜逃げである。特に、あてきの姉は子供が多くて九州を離れられず、妹は「年ごろ経るよるべ」を捨てて同行したというのだから、決死の覚悟での出発であつたわけである。

【32】「あてき」つまり現在の兵部君の歌「浮島を漕ぎ離れても行くかたや」の浮島は、山口県大島郡屋代島沖の浮島と考えておくほうが【10】との関連からもよいと思うのだが、いかがなものであろうか。

【33】「早船」『花鳥余情』に櫓が八桡も十桡もある船とある。十世紀前半は、渤海使節のために日本海横断の船を造つてやっていたから、大型船の技術はかなりあつたものと推察される。

「海賊の船にやあらむ、小さき船の飛ぶやうに来る」という記事からすると、海賊は小回りのきく船で縦横無尽に活躍していたものらしい。この頃は藤原純友の時代がモデル。響きの灘、つまり播磨灘あたりは海賊の巢窟であつた。

【34】「胡の地の妻児をば虚しく棄ててつ」と、『白氏文集』「縛戎人」を引用し、九州のイメージを辺境野蠻のイメージと化している。六条院を語る前座としてこれは是非とも必要な手続きであつたと考えられる。

【35】兵部の君は、夫を捨ててまでして、玉鬘に殉ずる道を選

択した女である。彼女は乳母子で、夕顔に対する右近、光源氏に対する惟光にあたる存在であり、須磨・明石両巻に照らしてみれば、その忠義な行為は当然といったところか。「あてき」という名前だが、これは「貴君」の意味で、所詮九州に土着することのできない人物ということを「あてき」という幼名で作者は示したかったのかもしれない。(30)。

【36】彼らは「九条に、昔知れりける人の残りたりけるをとぶらひ出でて」、そこに落ち着いた。考えてみれば、十六年振りの京都である。身寄りもなく、心細いこと極まりない心境であつたものと思われる。

【37】九条の当時の実体風景。「都のうちといへど、はかばかしき人の住みたるわたりにもあらず、あやしき市女商人のなかにて」。『今昔物語』的な一般庶民の喧騒を印象づける記述である。一行は相当がっかりしたのではないか。これが都か。

【38】「秋にもなりゆくままに」とある。九州脱出が、夏の初めであつたのだから、空しく三ヶ月が経過しているのである。

【39】「水鳥の陸にまどへるこち」という表現も面白い。陸に上がつた河童の趣がある。九州に逃げ帰った従者もかなりいたらしい。この三ヶ月間の深刻さは察するに余りあろう。

【40】豊後介の母が玉鬘の乳母なのだから、豊後介は玉鬘の乳兄弟ということになるうか。光源氏に対する惟光の感覚である。彼および「あてき」つまり兵部君が、身を捨ててまで玉鬘に尽くす心情は、こう考えると理解しやすい。

【41】玉鬘一行が最初になつた神仏が石清水八幡宮。これは

出身の北九州の縁で自然。そうしておいて、都の人の尊崇をあらわしている長谷寺の観音に詣でる。という展開はなかなか味がある。特に、一旦石清水にこだわったところがよい。明石一族があくまで住吉にこだわったほどではないが、長谷観音が効験があったということは、彼女が藤原氏であることと関係ないか。ちょっと考えてみる必要がある。

【42】「日の本のうちには」とある。源氏物語の頃、わが国は「日本」と意識されていたことが、これで分かる。

【43】京都より長谷寺まで、御利益を願って「ことさらに徒歩」で行ったから、やや日数を要し、樺市まで四日かかったらしい。旅の初日は宇治に泊まったものと思われる。何も書いていないけれども。

【44】玉鬘一行の総勢は、十三三人。心細いかぎりである。「樋洗めく者、古き下衆女二人」にまで言及しているところ、リアルである。「樋洗」はこういう時も、連れていったものと推察される。

【45】家主人の法師の言葉より、門前の様子がよくわかる。紀貫之の「人はいさ心も知らずふる里は花ぞ昔の香ににほひける」の状況を見るようだ。ところで、長谷寺に数多くあったと思われる門前の宿は、長谷寺法師のサイドビジネスであったのだろうか。この日、玉鬘一行が落ち着いた宿は、右近一行のような羽振りのよい客を呼び込もうと必死の体である。

【46】右近一行。高貴な女二人。下人男女、大勢。馬四五頭。綺麗な男の従者。玉鬘一行よりかなり数が多かったものと思わ

れる。【44】。

【47】右近は、最近年を取り、光源氏の世界で浮いた存在になりつつあるという自覚があり、長谷寺によく参詣していた。だから、玉鬘の発見は、彼女の人生の救いとなる出来事であったのである。観音の靈験あらたかといったところであろう。

【48】右近と長谷寺で出会うという発想。京都の市中で偶然遇うという設定を避け、行程四日、大和のはずれにある観音の聖地での出会いとしたのだから、この出会いが、運命的な様相をおび、玉鬘の田舎奥さを払拭するという効果がある点も無視できないであろう。

【49】「三条」などという名は下衆のものと知れる。

【50】豊後介は子供の頃、「兵藤太」と呼ばれていたらしい。彼は、玉鬘と乳兄妹だから、その頃は三四歳であったはず。で、夕顔の乳姉妹である右近のこの言い方は説得力がある。あれから十六年が経過しているのである。

【51】「あてきと聞こえしは」という右近の台詞のために「あてき」は唐突に登場したことが確認される。【30】。

【52】乳母の老齢ぶりが、夕顔の時の速さを示す。あれは、三条のように大袈裟に言えば「二十年ばかり経にける」昔の話なのである。夕顔巻冒頭の、死にかかった光源氏の乳母・惟光の母のことが思い出されよう。

【53】右近の言葉に、当時の治安の乱れが見て取れる。「かやうの所には、よからぬ生者どもの、あなづらはしうするも、かたじけなきことなり」。九州の乱れを書いた後だけに、乱れが九

州に限定されず、都周辺に及んでいる様が見える。こういう乱れの反対世界が六条院なのである。

【54】右近は、初瀬の観音に、玉鬘が光源氏の許で幸せになるように祈っている。結果、その通りになるのだから、観音は、右近の願いを聞き届けてくれたということであろう。玉鬘のこれからの人生は、神仏の思召し召しのままとということである。

【55】仕える女主人の幸せが、女房たちへ還元される。余得にあずかるわけである。三条の祈りには、そのことが露骨に語られている。

【56】三条の田舎振り。「あなかま、たまへ。大臣たちもしばし待て。大式の御館の上の、清水の御寺、観世音寺に参りたまひし勢は、みかど御幸にやは劣れる。あなむくつけ」は、大夫の監同様、ここでは笑わせる。しかし、この三条の確信が、光源氏の栄華を全国レベルで相対化するものである。作者の、玉鬘物語の構想の根も、そのあたりにあるのではあるまいか。【23】。

【57】その「大式の御館」のことだが、この人物は、ひよっとして筑紫の五節の母親のことであろうか。【6】。

【58】「藤原の瑠璃君」は、玉鬘が藤原氏であるということ、いまさらながら確認する条文である。玉鬘が実の父になかなか逢えないで苦勞するという点も、玉鬘物語の重要なファクターである。これは、実の母の許から切り離されている明石姫君の物語とも響きあっている。この位置関係も見逃すべきではない。

【59】右近の言葉。光源氏の意見を勘案して、現代の美人は、藤壺、紫上、明石姫君。玉鬘の容貌は、彼女たちに劣らぬとい

う。玉鬘は母親である夕顔に似た女なのである。右近が天下第一と認める紫上の美貌に勝るとも劣らないという玉鬘への賛辞は、玉鬘が光源氏の側にいて少しもおかしくない女であることを端的に意味する。さらには、玉鬘のために「家かまどをも捨て、男女の頼むべき子どもにも引きわかれ」「かえりて知らぬ世のこちする京にもうで来」た乳母と豊後の介一行の行為の正さをも表示するものである。

【60】玉鬘が「父大臣に聞こしめされ、数まへられたまふべきたばかり、おぼし構えよ」という乳母の依頼は自然である。玉鬘を光源氏の側に置くのは、なかなかの難事で、いかにも不自然なことなのである。初瀬の観音の力が、ここは是非とも必要であった。【54】。

【61】少弐は、光源氏の世話でもって少弐に就任したことが知れる。「まかり申しに、殿に参りたまへりし。少弐は空蟬の夫・伊予介のような立場であったと推測される。また、須磨巻の筑紫五節の父親、蓬生巻の末摘花の叔母の夫のことなどが、想起されよう。あの叔母の人事は、弘徽殿方の人事で、光源氏問題と関連していたものと想像される。少弐は、舶来の入口を押さえる重要な役職であるから、時の権力者の意向に沿ったものであったと考えられる。これで、いよいよ、この少弐が、筑紫五節の父親の部下であった可能性が強くなったと言えるよう。【6】。

【62】右近と玉鬘との贈答によって、初瀬の出会いが、次の二首の歌によって構想されたことが分かる。「初瀬川古川の辺に

二本ある杉年を経てまたもあい見む二本ある杉」(古今集)。「祈りつつ頼みぞわたる初瀬川うれしき瀬にも流れ合うやと」(古今六帖)。特に『古今六帖』の歌は、紫式部の祖父・兼輔のものである点が注目されよう。

【63】近江君発見の経緯を詳細に述べなかったのは、この巻で、玉鬘発見の詳細をのべたこととのバランスをとってのものであったと想像される。

【64】夕顔と玉鬘との差が分かるのは、右近と光源氏である。

右近の証言に注目したい。「母君は、ただ若やかにおほどかにて、やはやはとぞたをやぎたまへりし、これは氣高く、もてなしなどはづかしげに、よしめきたまへり」。品性に決定的な差があるらしい。父親の血筋のせいかと思われる。(16)。

【65】「秋風、谷よりはるかに吹きおぼりて、いと膚寒きに」とある。頃は秋の終わりという設定である。六条院はすでに完成している。

【66】右近の家は、「六条の院近きわたり」であった。これで分かるように、六条のあたりは、高級住宅街ではない。小家がちであった夕顔の五条とたいした変わりがないところであった。で、なおさら六条院の威容が目立つということだろう。「御門引き入るるより、けはひことに広々として」と本文にある。

【67】紫上の年齢。二十七八歳。紫上の年齢が明確に書いてあるのは珍しい。以後彼女は、若菜巻で一旦死ぬ三十七歳まで年齢は書かれていない。この時、彼女の美しさは上昇の一途をたどっていることが分かる。光源氏は、紫上より五歳くらい年上

であったから、光源氏の年齢もそここいっていることが推測されよう。

【68】右近や女房たちに「うるさきはぶれごと」を言う光源氏。中年男のいやらしさを見せつけている。これは、玉鬘物語のメインテーマである。私的世界の、くつろいだ出来事。新居落成間なしの満悦した光源氏世界である。

【69】紫上のことを光源氏は「上」と言っている。本妻感覚である。

【70】「夕顔の露のゆかり」である玉鬘の話聞き、「このわたりにわたいたてまつらむ」と光源氏が言った瞬間から、玉鬘は母・夕顔の見果てぬ夢を継ぐ存在となる。夕顔を、その昔、光源氏は、二条院へ連れてゆこうとした。その寸前に、某院の物怪に取られてしまったのであった。その印象は強烈で、読者の等しく記憶していることである。

【71】「容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや」と光源氏は右近に質問している。光源氏は夕顔のことを「夕顔」と言っている。あだ名で呼ぶのが普通のことであったと分かる。

【72】玉鬘発見の報告を、右近は光源氏と紫上と一緒にいるところで行った。したがって、紫上は、玉鬘問題には最初から絡んでいたことになる。玉鬘が、紫上を脅かす存在ではないことを、この場面できりげなく作者は書いているということだろう。安心できる座興の女と言えは言い過ぎか。

【73】父・内大臣のもとに引き取られるのは得策でないと光源氏が言う。あちらは子供が大勢いて、いまさ名乗りでても苦

勞するだけだ。一応の理屈である。が、女は二人しかいないので、貴重な存在となるかもしれないことをわざと言っていない。悪辣である。前巻・少女の記事がうまく生かされていることが分かる。なお、内大臣の本妻は、なかなか強い人で、その昔、夕顔を脅迫したことなど、思い浮かべれば、玉鬘が六条院へ引き取られるのが自然だと、読者は思うかもしれない。なお、内大臣家の苛烈さは、冒頭の大夫の監の話と微妙に呼応し、六条院への道を開いている点も忘れるべきではない。

【74】光源氏の玉鬘に対する世話話、亡くなった夕顔に対する罪はろぼしであるという発想を右近がしている。これは、右近の見果てぬ夢、願望であろう。この件は、光源氏の秋好中宮に対する態度と対になる構想であろう。しかしながら、光源氏のほうは、玉鬘を引き取り「好きものどもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなさむ」というのだから、この段階では、あまり真面目に考えていない。ごく軽い気持ちである。

【75】光源氏の脳裏に、末摘花の例が浮かぶ。そもそも末摘花は、夕顔の夢を追うところに出現した女性であるのだから、この光源氏の心の動きは、文脈に沿ったきわめて自然な心理である。

【76】右近が玉鬘を説得する。「親子の御契りは、絶えて止まぬものなり」。いつかは父・内大臣に会える。しかし、この文章、なにやら、明石姫君と明石御方のことをいっているようで、おかしい。

【77】光源氏への返歌に、玉鬘の周辺は「唐の紙のいとかうば

しきを取り出で」た。少弐の家らしい処置である。

【78】玉鬘は花散里の許「丑寅の町の西の対」に置くことを光源氏は決意する。夏の女という設定も、夕顔の情熱を考えるとふさわしい感じがする。また、花散里のもつ昔懐かしい感覚にも、玉鬘は違和感なくおさまろう。

【79】紫上に夕顔のことを告白して、彼女が生きていたら、明石御方ぐらゐの取り扱いを受けたはずだと、右近みたいなことを言う光源氏。明石御方との対比の中に玉鬘がいることに注意したい。六条院の北側の二町は、南側の紫上と秋好中宮との二町と同様、これでもって釣り合ったといふべきであろう。

【80】夕顔に対する光源氏の認識。「かどかどしう、をかき筋などはおくれたりしかど、あてはかにろうたくもありしかな」。紫上の面前で述べた言葉だから、多少の割引きは必要かもしれないが。

【81】光源氏が、明石御方と夕顔を同列に論じたのを聞いた時、紫上が言う。「さりとも、明石のなみには、立ち並べたまはざらまし」。思わず出た本音といふべきである。紫上は、明石御方を相当に「めざましと心置」いているのである。この時、そばに可愛い明石姫君がこの話を聞いているところ、スリリングである。

【82】光源氏と紫上が玉鬘のことや、「北の町にものする人」つまり明石御方のことを話していたのは「九月のことなり」と作者は明言している。少女巻の末尾に、明石御方の六条院入りは「神無月」つまり十月とあることとこれは矛盾する。不審であ

る。どう解釈すればよいのか。それにしても、すぐ前の巻との矛盾はおかしい。紫式部がこういう単純なミスを犯すとは信じられない。語り手が違うからか。あるいは書き手が違うためか。

【83】「市女」は、高級貴族の侍女などの就職斡旋もしていたらしい。家政婦派遣業みたいでおもしろい。

【84】玉鬘の六条院入りは十月。

【85】光源氏は、花散里に「山がつめきて生ひ出でたれば、鄙びたること多からむ。さるべく、ことに触れて教へたまへ」と言う。花散里が田舎者の玉鬘を教育するという発想は、その奥に、紫上が明石姫君を教育しているという事実の表層として機能しているのだという視点が重要だと思う。

【86】光源氏の夕顔観。「心なむ、ありがたきまでよかりし」。花散里に語ったものだから、本音に近いのではあるまいか。あるいは、顔のよくない花散里への配慮のにじんだ言葉と考えたほうがよいか。貴方に似ている人ですよ、と光源氏は言っている。嫌をとりむすんでいるといった風に解釈しておいた方が、この場にふさわしいかもしれない。ともかくにも、玉鬘は、母に似た世界に落ち着くことになったわけである。

【87】その夜、光源氏と玉鬘の、最初の対面。玉鬘の声を聞き「昔人にとよくおぼえて若びたりける」と思う光源氏。夕顔は魅力的な声をしていただけのと知れる。忘れられない声の記憶。この時、光源氏は、玉鬘が夕顔の遺児であることを確信したにちがいない。考えてみれば、光源氏と夕顔とは、顔を隠した暗闇の間柄であったではないか。声の記憶は、したがってなかなか

カリアルな設定なのである。

【88】「若びたまふべき御ほどにもあらじを」という事実。大人のやりとりが玉鬘には期待できる。何も分からぬ人を教育するのではない。批判力をもった人に対する教育。これも、なかなか面白い構想ではないか。光源氏による玉鬘教育は、紫上を教えたようにはいかないはずである。

【89】玉鬘を六条院の花形にするという発想。玉鬘は、光源氏の戦略上の一駒にすぎない。さしあたってのターゲットは「兵部卿の宮」。光源氏が紫上に語っているとおりである。

【90】光源氏の手習歌。「恋ひわたる身はそれなれど玉かづらいかなる筋を訪ね来つらむ」。手習とは、思わず出た心の底の思いの表白である。光源氏の心の底には、自分は昔ながらの自分であり、その自分を昔ながらの夕顔が訪ねてきた、という思いが抜きがたくあるものと思われる。引き歌であるはずの「いづくとて訪ね来つらむ玉かづら我は昔の我ならなくに」(後撰集)との対比が鮮やかである。この引き歌の通り、光源氏は近い将来、自分が昔ながらの自分でないことを思い切り知らしめられる。そういう予感がしよう。朝顔を経過した読者には、特にそう思われるはずである。

【91】真面目な夕霧は、先ず騙される。兄として早速に挨拶に来ている。まだ大人になっていない青年の悲しさである。

【92】六条院に来て、やっとあの三条も「大式をあなづらはしく」思うことができるようになった。「まして、監が息ざしけはひ、思ひ出づるもゆゆしきこと限りなし」という心境になっ

ている。六条院が王朝貴族社会最高の場所であることが、田舎者の目によってようやく確認される場面である。ということは、逆に考えれば、この条文は、六条院以外の、都のいかなる場所も、どこも大式や監の威勢に及ばない、ということを示さるべく表示しているのだということをも意味しないか。この、パースペクティブな視点を確保しておいて、紫式部は、これから、王朝貴族社会の、最高の日々を語ろうというのである。田舎者のパースペクティブによって追いつめられた貴族の悲しい一条の影が、そこはかとなく六条院には射しているという感想はめぐいがたくあると思う。

【93】豊後の介は、光源氏家の家司になっている。彼の功績にたいする光源氏の論功行賞である。

【94】その、王朝貴族の最高の日々の展開。手始めは、豪華絢爛たる新春のための衣裳合わせ、である。それにかこつけて、紫上の支配権の及ぶかぎりのオールキャストが、あらためて紹介されている。列挙すれば、

紫上 紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたる

明石姫君 桜の細長に、つややかなる搔練取り添へ

夏の御方（花散里） 浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、にはひやかならぬに、いと濃き搔練具して

西の対（玉鬘） 曇りなく赤きに、山吹の花の細長

末摘花 柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れる

明石御方 梅の折枝、蝶、鳥、飛びちがひ、唐めいたる白き小

桂に、濃きがつやかなるを重ねて

空蟬の尼君 青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまうて、御料にある梔子の御衣、聴し色なる添えて

【95】末摘花・明石御方・空蟬については、光源氏が選んでいる。明石御方がここに入れられていることが注意されよう。

【96】空蟬が光源氏の許に引き取られていることは、ここが初見。彼女の老いが夕顔時代からの遠い時間を示し、光源氏の上に流れる残酷な時間をも示唆しよう。

【97】「末摘花、東の院におはすれば」という記事でもって、空蟬も東院に収容されているらしいことが分かる。

【98】型通りお礼をする末摘花の律儀さは、昔のままである。雀百までといったところか。彼女の歌、「唐衣」好きも千編一律である。こうなると、彼女の人生も、ある種の凄味を帯びる。

彼女の目からすれば、光源氏の歌など軽佻浮薄の見本であるに違いない。彼女は、一世代前の文化を今に伝える貴重な存在である。その文化こそ、光源氏の親の世代の栄華の名残であるから、貴重なのである。

【99】紋切り型の代表的歌の言葉遣い。「唐衣」「袂満る」「円居」「あだ人」。

【100】末摘花は、常陸宮の残した「紙屋紙の草子」を光源氏に与えたことがあったらしい。和歌の理論書。中国詩学をわりやり和歌に適用した乱暴な本である。平安初期の髓脳書には、紫式部も頭を痛めていたものと思われる。ますますって、末摘花が、平安初期の大陸文化人の生き残りであることが明瞭であ

る。

【10】「女は、立てて好めることまうけてしみぬるは、さまよくらぬことなり」。スベシャルイズムを排除しようとする女子教育論。夕霧の教育論にも通じるし、雨夜品定めの時とも変わらな。これは、形を変えた明石姫君の教育方針の提示であろう。「ただ心の筋を、ただよはしからずもてしづめおきて、なだらかならむのみなむ、めやすかるべかりける」。

【12】光源氏の未摘花への返歌は、小町の「いとせめて恋しきときはむばたまの夜の衣を返してぞ着る」（古今集）を踏まえたもので、一瞬、小町と未摘花のイメージが重なる。これは、趣味の悪い残酷な仕打ちである。光源氏の空前絶後の幸せには、未摘花の道化が必要ということか。また、本来笑いの対象であるべき玉鬘の田舎ぶりから笑いを転移させる役割を、この未摘花が担っているという解釈も面白い。平たく言えば、未摘花が存在することによって、玉鬘は笑われずにすんでいるのである。

初音巻

【1】六条院の四季を語る。紫式部の考える最高の四季とは何か。『古今集』四季部をなぞるものか。この世の龍宮感覚か。それとも別の発想か。

【2】新春の場面は、前巻末尾の予告どおりの展開である。住居もスタッフの衣裳も真新しい。「まねびたてむも言の葉たる

まじくなむ」。作者は、言語表現の極北を意識している。はたして、美に言語は立ち向かえるのか。言葉で表現できない美しさ、とっておいて、「生ける仏の御国」とやる。この連続感覚が鋭い。こう言われると、読者の脳裏には、否応なしに浄土三部経あるいは『往生要集』に描かれた絢爛たる浄土絵巻が広がり、六条院のイメージを形成してゆくからだ。

【3】「春の御殿の御前」が「生ける仏の御国」。六条院全体がそうだとおいていいのではない。紫上がいて、明石姫君がいる辰巳の世界が、この世の極楽浄土だといっているのである。だとすれば、論理的にいうと、他の世界は此岸、煩惱から解脱できない六道輪廻の世界ということか。天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄。ちなみに、この六道においては、天界が最高。が、天界とて輪廻は免れず、天人五衰がある。紫上と明石姫君および光源氏は、ここにおいて、六道輪廻の世界を解脱した衰えることを知らぬ浄土の人生が保証されたと考えべきか。あるいはまた、今は春だから、紫上のところが極楽なのは当然のことであって、夏が来れば、花散里および玉鬘のところが「生ける仏の御国」となる。ただそれだけの単純な意味なのかもしれない。ただ、この仏を阿弥陀如来と単純に考えるのも問題かもしれない。むしろ、これも文字通り釈迦如来と考えておく方が、源氏物語全体の構想に適っているように思う。光源氏のいる世界と光源氏のいない世界は、仏のいる世界と無仏の世界とに対応していると考えるほうが源氏物語世界を理解するには適当ではないか。

【4】六条院を「仏の国」のイメージで描写しているということは、極楽浄土のイメージをタブラそうとしているということだろう。したがって、「生ける仏の御国」と言った瞬間から、作者は多くのことを省略してよい立場に立ったと理解される。

桐壺巻において、「長恨歌」を引用することで、読者の想像力を味方にして大量の省略に成功した。その技法の再現である。

【5】明石姫君のまわりを「若やかにすぐれたる」女房でかためている。姫君教育の始まりである。六条院の最高の四季は、明石姫君に対する環境による教育と考えると分かりやすさう。紫上の周りは「すこし大人びたる限り、よしよし」い女房でかためているのは、教育者側の補強であらう。

【6】光源氏が顔を出す。「そばれあ」っていた女房たちがあわてて「懐手ひきなおしつ、いとはしたなきわざかなとわびあへり」とある。懐手とはどういう格好なのだろうか。現代のポケットに手をいれている感覚と同じか。

【7】中将の点描。彼女は須磨巻で、紫上付きの女房となり、以来紫上に心服している。大人びた女房の代表。【5】。「われはと思ひあがれる」とあるから、清少納言みたいなタイプであったと考えられる。彼女は幻巻まで登場する。重要な脇役である。

【8】正月に鏡餅を飾る風習は、ひょっとしてこの場面でもって固められたのではないかと推察される。「近江のや鏡の山を立てたればかねてぞ見ゆる君が千年は」(『古今集巻二十 大伴黒主』)。千年の長寿をことごとくという意味である。鏡餅は文字

通り鏡なのであって、この鏡に照らして自分の未来を見るという発想である。なお、二つ重ねるのは夫婦の和合を象徴していることは、光源氏が紫上に贈った歌「うす水とけぬる池の鏡には世にたぐひなきかげぞならべる」によって理解されよう。

【9】「朝のほどは人々参りこみて」。なんでもない描写であるが、源氏物語が光源氏の栄耀栄華の、その一部を描いているのだという認識を読者に意識させる記述である。源氏物語の奥行きの表示である。【4】。

【10】光源氏が新春の年始「参座」に、御方々をまわる。光源氏は「心ことにひきつくるひ、化粧じたまふ」とある。彼も緊張しているのである。出発にあたり、先ず、光源氏と紫上の贈答がある。光源氏によって「上」と呼ばれる紫上の、ここが幸せの頂点というべきであらうか。「世にたぐひなきかげぞならべる」。

【11】次に、明石姫君。ちょうどタイミングよく、「北の御殿」明石御方から正月の贈り物と歌が届いている。今日は、小松を引く「子の日」。明石御方の歌、「年月をまつにひかれて経る人にけふ驚の初音聞かせよ」。姫君は母と別れてから、あしかけ五年たっている。「罪得がましく心苦し」と光源氏が思うのも当然のことである。この意識の延長上に今日の泊まりがある。明石御方は只今のところ苦界の人なのだ。姫君の返歌「ひきわかれ年は経れども驚の巢立ちし松の根を忘れめや」。子どもらしい素直な歌は、さぞかし実母を喜ばせたことだろうと想像される。この歌は、光源氏が指導した歌ではない。「この御返り

は、みづから聞こえたまへ」。そして、「をさなき御心にまかせて、くだくだしくぞある」という草子地による批評は、まだまだ姫君の教育が緒についたばかりであるという印象を読者に与える効果がある。この巻は、最初から明石姫君に焦点が合っていて、六条院の意味するところを正確に示している。主役は決して紫上ではない。彼女は養母、脇役なのだ。

【12】次に、「夏の御住ひ」の人、花散里の描写がある。光源氏と花散里の關係は余人の窺い知れぬ側面があるようだ。夕霧が少女巻で思案投首であったのも不思議ではない。後にある末摘花とダブルイメージで理解したらやや分かるかもしれない。

「いとむつまじくありがたからむ妹背の契り」。が、ここは「われならざらむ人は、見ざめしぬべき御ありさま」と、花散里の衰えた様が露骨に描かれて、紫上との対照があざやかである。よい性格だけでももっている様子である。「わが御心の長さも、人の御心の重きをも、うれしく、思ふやうなり」と光源氏は思っている。さすがに、玉鬘でもないければ、夏の御殿は見ておれない風情である。

【13】髪は薄くなったなら「えびかつら」を用いてカバーする。王朝時代の女のたしなみであった。花散里は、自然にまかせているようだが。

【14】もし花散里が「心軽き人の列にて、われにそむきたまひなましかば」このような幸せな境涯にはなっていないのだ。という光源氏の思念。花散里巻の中川の女が、そういう「心軽き人」を代表した設定であったことが、いまさらながらに了解さ

れる。六条院の主人公たちの価値は、花散里の生きざまそのものが象徴しているのだという発想であらう。

【15】「西の対」の人・玉鬘は、花散里という背景をもつことによって、一人はなやかな雰囲気をかます。「山吹にもてはやしたまへる御容貌」となる。彼女は、山吹色がよく似合う人なのである。前巻の衣装合わせは正解であったことが分かる。そういう玉鬘を光源氏が「えしも見過ぐしたまふまじきにや」という観点を草子地で述べ、以後の展開をここに示唆している。

【16】「もの思ひに沈みたまへるほどのしわざにや、髪のかみし細りて」とある。苦勞すると髪がぬける。髪の少ない人は苦勞人なのだという認識である。

【17】光源氏が玉鬘に、「初琴ならふ人」明石姫君との対面を勧めるところで、察しのよい読者は、玉鬘という存在が、明石姫君が主役となる日までの繋ぎなのだということを了解するだろう。桐壺更衣↓藤壺↓紫上↓明石姫君。この系譜を見て、藤壺と紫上、そして桐壺更衣と明石姫君とが、それぞれ血縁関係にあることに注意したい。この二つの系統どうしも、あるいはそういう関係にあるのかもしれない。藤壺と紫上は中継ぎ。スターとアンカーが主役なのだという見方もある。先祖帰り。一族復興の成就を目指して源氏物語は着実に前進している様が見て取れる。

【18】暮方に明石御方の許に行く。この正月元日の光源氏の行動は、彼の目を通した六条院オールキャストの紹介である。元旦に明石御方の許に泊まるということは、始発点における彼の

罪の意識のしからしめるところであり、明石御方にはもうすこし我慢してもらわなければならぬという意思表示であろう。

〔11〕。彼は、「咲ける岡辺に家しあれば」という、近くに住みながら逢えない実母の情を充分に理解しつつも、玉鬘に言ったような言葉を、いまのところ明石御方にかけてやれないのである。逢いたくても逢えない明石御方の心情は、同じく実の父に逢いたくても逢えない玉鬘の心情と共鳴する。このあたり構成の妙を感じないか。

〔19〕明石御方のところに、「草子」「手習」などが散らかっているということ。彼女の文化的雰囲気を感じている。「筋かはり、ゆゑある書きざまなり。ことごとしう草がちなどにも才がらず、めやすく書き済ましたり」。「草」は万葉仮名の草体であるが、もとの漢字を強くにじませた字体であろう。これを駆使すると、「才がある」雰囲気になり、嫌われた。明石御方の場合は、そのあたりの配慮に満ちたものであったが、基本的には今風というものではなく、古い時代の文化を体現していたものと推察される。また、手習は、もの思う時のしわざであるという発想にたてば、彼女の現在の可愛そうな雰囲気作りということも当然考えられる。

〔20〕琴（きん）がある。光源氏が残した琴か、あるいは明石入道遺愛の琴か。

〔21〕明石御方の髪が「けざやかなる髪のかかりの、すこしさはらかなるほどに薄らぎにける」という小さな記事がある。苦勞をしのばせる記述である。〔16〕。光源氏が、ここに泊まる

決意をした重要なファクターであろう。なお、この巻には髪描写が多い。

〔22〕光源氏が明石御方の許に泊まったということは、「新しき年の御騒がれ」となる。また明石の「おぼえ異なりかし」という印象を決定的なものとした事件である。この事実、明石の意味の重さを、改めて読者に突きつけるものである。曙の頃、光源氏を迎えた紫上が不機嫌なのは当然として、この設定、若菜巻の女三宮事件への小さな伏線となっているように思う。

〔23〕光源氏が翌日、臨時客の接待を口実に、紫上から「おまかくし」したという記述は、逆に紫上の重さの表示でもある。かくて、紫上と明石御方は均衡する。なんといっても二人は生涯のライバルなのだという設定である。

〔24〕臨時客の内容。「上達部、親王たちなど、例の、残るなく参りたまへり」。「例の、残るなく」という表現に迫力がある。光源氏の権力も、いまや絶頂である。そして、その美しさ、「有職」いづれをとっても光源氏に敵うものはない。

〔25〕「若やかなる上達部などは、思ふ心などものしたまひて、すずろに心懸想したまひつつ、常の年より異なり」。これは、六条院の顔見せとともに、玉鬘効果である。光源氏の戦略は、ずばり成功している。

〔26〕「かくののしる馬車の音をも、もの隔てて聞きたまふ御方々」というのは、花散里や明石御方のことであろう。彼女たちは、「運のなかの世界に、まだひらけざらむこち」であろうと作者は記す。『観無量寿経』によれば、下品下生の者ですら運は

開いている。ならば、彼らは、極楽浄土とは無縁の人々。阿弥陀仏によって救われていない人々という発想だろうか。(3)。しかし、蓮の中の世界にいることは間違いないのだから、一応、地獄の業火からは救われているのだが、まだ下品下生のステージにも上がっていない気の毒な人々という設定かもしれない。こういう発想は、『浄土三部経』のもじりで、なかなか面白い。しかし、前にも言ったように、六条院を阿弥陀浄土ではなく、釈迦の世界と考えれば仏界にはいるのだけれど、なかなか仏に会えない人々と考えると分かりやすいだろう。

【27】東院にいる人々の位置づけは、「世の憂き目見えぬ山路」である。これは、『古今集』巻十八雑下にある物部良名の歌「世の憂き目見えぬ山路に入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」を踏まえたもの。「思ふ人」つまり光源氏への愛情以外「ほだし」のない「ただ心の願ひに従ひたる住ひ」であるから、浄土とはいえないかもしれない。生活には不自由しない世界。位置取りとしては、憂き世を捨て、浄土に赴く途中といったところであろうか。ただし、そのためには光源氏への愛情を捨てなければならぬ。空蟬はともかく、末摘花などとても無理な相談だといったところか。

【28】東院には、末摘花と空蟬とがいる。空蟬は「行ひのかたの人」、末摘花は「仮名のよろづの草子の学問、心に入れたまはむ人」と表示してある。後に詳しく書いてあるのだけれども、この一文で、前巻からの連続で読者は二人のことに気付くと思う。その他の人については具体的に触れられていない。

【29】「常陸の宮の御方」末摘花を光源氏が大切にするのは、「人のほど」、つまりその身分の故であるところ。「人目の飾りばかりは、いとよくもてなしきこえたまふ」という光源氏の取り扱いは、失礼な感じはするが、このあたりが限界というものである。これは、後の例でいえば、不義発覚後の女三宮に対する扱いの先蹤である。さて、こは、常陸宮の重さを了解すべきである。かつての桐壺族のなかで、常陸宮は重要な人物であったものと推測される。光源氏の末摘花に対する「われだにこそは」という義務感、そういう過去の遺産として考えるべきではないか。

【30】末摘花の唯一の美点であった黒髪は、「滝の淀みはづかしげなる」という状態になっていると記してある。全面的に白髪と化していることがわかる。蓬生巻の再会から、およそ七年の歳月が流れたのである。浄土の人々は年をとることもなからうが、この世の人々にとって、年月は残酷であるという読みも可能か。しかし、この時の経過は、光源氏にも適用されるのだという視点もおさえておく必要がある。この巻、髪に関する記事が多いことに注意したい。

【31】末摘花の鼻の色は、しかし不変である。光源氏も几帳の中に立て彼女を隠したというのだから酷い。先の花散里の場合とは逆である。末摘花本人がそれを何とも思っていないのも凄い。もう一つのトレードマークであった「皮衣」は、兄である「醍醐の阿闍梨の君」に取られたところ。またこの兄も鼻の赤い人であったと、こんなところで作者はこんなことを付け加え、

赤鼻を強調し末摘花をコケにしている。語り手が、紫上系の人であるから、いたしかたないという発想であろうか。蓬生巻は、語り手が末摘花の側近で、あれは特殊な視点だということであるのかも知れない。もっとも、末摘花を笑うことによって、明石や北九州出身者の田舎振りを解消する作用とすることは確かにある。

【32】黒貂の皮衣を話題にし、あれは山伏の蓑代衣にふさわしいと言った後、光源氏が、自分の贈った「白妙の衣は、七重にもなか重ねたまはざらむ」と言ったのは意味深長であると思わぬか。常陸宮のモデルと目される重明親王が黒貂裘を八重に着ていた話が『江家次第』にある。光源氏の言葉は、この故事をふまえた言辞であったのではないか。なお、白妙の衣を着ると、末摘花の白髪と相まって、白尽くしの様相を呈する。これも作者の計算の内か。

【33】光源氏も末摘花の世界に來ると、常陸宮の時間にいる錯覚にとらわれたものとみえる。「ここにては、いとためにきすくの人にておはす」。常陸宮の時間とは、光源氏の父母の時間である。

【34】光源氏の末摘花を前にしてつぶやいた歌も、ちょっと酷いのではないか。「ふるさとの春の梢にたづね来て世の常ならぬ花を見るかな」。しかし、いみじくもこの歌、「ふるさと」に、二条院の過去をにじませている。二条院は、光源氏の母なる里、「世の常ならぬ」世界であった。

【35】故郷二条院の春は、別院・東院における末摘花の存在に

よって、六条院の春を手放しで礼讃する読者への、冷水を浴びせるようなマイナス効果を導入している。作者は、六条院の栄華など、頭っから信じていないのかもしれない。それとも、この世の最大の栄華を描くには、ピエロが必要ということか。

【36】「空蟬の尼衣」は、末摘花と比較されることによって、非常に好意的に扱われている。「松が浦島を、はるかに思ひてぞやみぬべかりける」という光源氏との関係も、現状は、彼女のかつての思いに照らせば満足のゆくものであると推測される。紫式部が、そつと自画像を源氏物語にのびこませた感が深い。また、源氏物語の最後のヒロイン浮舟が、最後に空蟬のイメージをかもしれないように設定されている点からしても、このあたりで空蟬のしっかりしたイメージを完成しておく必要があったのかもしれない。また、光源氏の世界が仏の世界だとするこの巻の基調からすれば、その世界にもっとも相応しい存在が空蟬なのだという発想の重要さは、留意する必要がある。源氏物語は空蟬に始まり空蟬に終わる。

【37】光源氏は空蟬に言う。「おぼし知るや。かくいとすなほにしもあらぬものをと、思ひ合はせたまふこともあらじやはとなむ思ふ」。この言葉を、源氏物語の終末部分に持ってゆく必要を感じる。「すなほ」でない薫。光源氏のいない今、浮舟を救う男など、どこにもいないのだ。という響きが、最後で有効となると思うから。

【38】「かやうにても、御蔭に隠れたる人々多かり」とあるから、末摘花と空蟬の両者は、そういう人々の代表ということである。

六条院を構成する人々は、さらに代表の代表で、まさに選ばれた人々であることが分かる。彼女たちの裾野は、かくも広大なのだということを作者はさりげなく示したかったのかもしれない。さても、東院にはかなりの人々が収容されていたものとみえる。筑紫の五節は、はたして入っているのだろうか。

【39】東院の「多くの人々」に「ただ限りある道の別れのみこそうしろめたけれ。命ぞ知らぬ」という光源氏の言葉を聞いていると、東院の場面は、これが最初で最後であるような気がする。

【40】光源氏のイメージはこの段階で、仏である。六条院・東院は、仏の世界。ものみな救われる。光源氏は「所につけ、人のほどにつけつつ、あまねくなつかし」い仏のような存在である。

【41】「今年は男踏歌あり」とある。男踏歌は円融天皇の天元六（九八三）年以降絶えている。紫式部時代には無かった行事である。これをわざわざ使用したのには理由があるのだろうか。大陸伝来の「世離れたるさま」の踏歌であるから、光源氏文化にふさわしい行事だと判断したためであろうか。この文化が、明石御方の文化に共鳴しているところが、この段階では重要だということではないか。

【42】男踏歌の道順。内裏↓朱雀院↓六条院。「道のほど遠くて」から理解されるように、六条院にわざわざ寄っている感覚である。これは、光源氏の権力権威が内裏のそれにまで達していることを意味しよう。この男踏歌は、世俗の視座から見た六条院

の栄耀栄華の確定である。

【43】この男踏歌が、春の御殿の前、つまり紫上の前で行われ、六条院の人々が皆招かれて、「左右の対、渡殿などに、御局しつつ」見物したということは、紫上を頂点とした六条院のオールキャスト、再度の顔見せという意味合いがある。紫上の栄華、ここに極まるの図である。（10）。

【44】男踏歌の見物という機会を利用して、予定通り、玉鬘は明石姫君と対面している。（18）。紫上とも几帳こしに挨拶を交わしている。招待にすぐ応じるところが玉鬘らしいまめかしさである。明石御方も招かれ、すぐ近くまで来ているはずだが、作者がそのことに全く触れようとしないのも、にくらしい構成である。これで、いよいよ明石御方は哀れを醸す。

【45】夕霧と内大臣の君達が「竹河」を歌い舞う。内大臣の君達は、柏木と特定できない。あとの光源氏の言葉に「弁の少将」とあるから、この日、ひょっとすると柏木は男踏歌に参加していなかったのかもしれない。

【46】「ものの上手多かるころほひ」、「あやしく有職ども生ひ出づるころほひ」という発想は、紫式部の時代、道長を頂点とする一条王朝の盛儀を意識したものと思われる。

【47】美声の持ち主「弁の少将」。紅梅や竹河巻まで、この段階で見通しているのだろうか。多分そうだと思われる。「竹河」という言葉も男踏歌なら当然だが、よく効いている。

【48】夕霧は、確実に理想の男性になってきている。真面目でいながら遊び心をもつ男。これを褒める光源氏も、世代交代の

印象が強い。

【49】「私の後宴」を催すために秘蔵の琴をとりだす場面、作者はこの巻を閉じている。この後、集まった御方々で女楽が行われたことが想像される。作者は、この場面を省略している。若菜下巻の、女楽を書くために、そうしたのだろうと思われるがどうか。

胡蝶巻

【1】時は、「弥生の二十日あまりのころはひ」、晩春である。前巻が光源氏の私生活の総論的紹介だとすれば、この巻から各論に入るといったところであろうか。

【2】晩春なのに、「春の御前のありさま」は、ほかの里が、季節が移らぬのではないかと錯覚するほどに「常よりことに尽くしてはふ花の色、鳥の声」が新鮮である。不老長寿の、神仙的感覚でもって、春の園を作者は描こうとしている。前巻の「生ける仏の御国」の発想からの自然な連続である。

【3】「山の木立」は、寝殿から眺めて、中島の背景をなす部分。ここに築山が設定されていたことが分かる。

【4】新造の唐船の進水式。船衆。「雅楽寮の人召して」とある。公私混同、こんなこととしてよいのか。という素朴な疑問が浮かばないだろうか。親王や上達部などが多数やってきている。太政大臣・光源氏の行為は、公事にほかならないということか。

このあたり、紫式部当時の里内裏の様がはからずも露顯していると考えられよう。

【5】『紫式部日記』寛弘五年十月十六日。皇子に会うために一条天皇が道長の土御門邸に行幸になる。その時、池に新造の龍頭鍋首の船が下ろされ、万歳楽、泰平楽、賀殿などという舞楽を演奏しつつ池を巡っている。この日のことが、この巻に生かされているのだろうか。あるいは、筑前の命婦が、その時、東三条院詮子の時の行幸を思い出しているところからすると、詮子の時代にも、こういうことがあったのかもしれない。とする、モデルとしてはそちらの方が都合がよいのだけれども。

【6】中宮が「春待つ園は」とやったのは、三巻前の少女巻であった。その返歌を、紫上がここでやるという。二人の間のバランスが再度強調される。春秋の争いでもって、紫上は秋好中宮と遜色なく釣り合って、全くの五分であることを示そうという魂胆であろう。かくて、紫上の地位は秋好中宮によって相対化され均衡を強調される。光源氏と六条院も連動し、内裏に匹敵する重さが付与され、光源氏は帝と均衡することとなる。

【4】。

【7】中宮本人は、軽々しく春の園を訪問するというわけにはいかない。中宮が動くと行啓となる。動かぬことによる中宮の重さの表示である。したがって、中宮の名代として、中宮の女房たちが龍頭鍋首の船に乗って、紫上の春の御殿「東の釣殿」までやって来ることになる。東釣殿まで船は進んだのだから、寝殿の前の池をゆったりと中宮の船が横切ったことになる。途

中「中島の入江」に停泊。中宮方の女房が歌を詠んでいる。中島に入江があって港の風情に設定してあるというのも、巨大で豪華な六条院の印象を決定的にする効果がある。なお、琵琶湖に浮かぶ竹生島は、琵琶湖湖底にある龍宮の突端部であるという。この発想で、六条院の中島をとらえると、この場面が一層盛り上がるかもしれない。

【8】紫上と光源氏は「東の釣殿に」「若き人々」を集めて船の到着を待った。釣殿は池に面した納涼の施設で、壁は無く御簾を垂らすのみの吹きさらしである。見られる可能性が高いから、若くて美しい女房たちを配置したものと思われる。

【9】船の上から、六条院を眺めるという視点は新鮮である。はるばると見える庭、枝を垂れた柳。「廊をめぐる藤」、池に影を映した山吹は岸からこぼれて、今が盛りの様子。晩春の美景である。

【10】「楫取の棹さす童べ、皆みづら結びて、唐土だたせて」とある。「みづら」は唐風の髪型であったと知れる。このあたり唐風が強調されていることに注意。光源氏の文化の表示である。【11】紫上の世界に出たとたん、船上の中宮の女房たちは「まことの知らぬ国に来た」という感想をもつ。中宮の世界がこの世。紫上の世界は異界という発想をおさえておく必要がある。

「斧の柄も朽いつべう思ひつつ、日を暮ら」した彼女たちの作った歌の一つ、「亀の上の山もたづねじ船のうちに老いせぬ名をばここに残さむ」の歌は、紫上の春が蓬萊の国、不老不死の神仙郷であるという発想である。「行く方も、帰らむ里も忘れぬ

べう」という中宮女房の思いも同様の発想である。「斧の柄」の発想は、松風巻に既出。六条院春の御殿が、松風巻における「大井亀山」と同じ発想で貫かれていることに注目したい。こは、光源氏の世界の「夜光る玉」である明石姫君がいる神仙世界、つまり「都の龍宮」なのである。船の強調も、龍宮の縁語として了解すべき事柄ではないか。

【12】女房たちが船を釣殿にさし寄せ、船から下りたのは、「暮れかかるほど」であった。ということは、中宮の女房たちは船の上あるいは中島に上陸して、相当長い間遊んでいたものと知れよう。

【13】釣殿は舞台に見立てられ、黄昏方、ここで音楽と舞が行われたと見える。この時、御簾は上がっていたものと推測される。着飾った「御方々の若き人ども」の姿。光源氏や紫上、明石姫君は、正殿からこれを遠望しているのである。

【14】夜になると、庭に篝火をともし光源氏と紫上、明石姫君のいる御殿と庭で音楽会がおこなわれる。「皇璋」「双調」「安名尊」「喜春楽」。この日は徹夜であった。「生けるかひありと、何のあやめも知らぬ賤の男も、御門のわたり隙なき馬車の立処にまじりて、笑みさかえ聞きけり」とある。庶民の姿が描かれている珍しい場面。

【15】「安名尊」である。「あな尊と 今日尊とさ や 昔もはれ 昔も 斯くやありけむ や 今日尊さ あはれ そこよしや 今日尊さ」。明石入道の若き日、光源氏の祖父と祖母の栄耀栄華日々が、今復活したという光源氏の心理を、この

催馬楽で表現しているを見る。いかが。

【16】兵部卿の宮が、青柳を「折りかへしおもしろく歌ひ」、光源氏がそれに和した。これがこの日のフィナーレであり、最後の見せ場であった。この兵部卿の印象も強烈である。玉鬘物語の一方の主人公であるからだろう。

【17】中宮は、遠い音楽を「ねたう聞こしめす」ばかりである。紫上は、中宮と同等もしくはそれ以上なのである。これ以上の女の栄華はない。(5)。

【18】「西の対の姫君」、つまり玉鬘は、すでに世に知られ、六条院における未婚のスターとなっている。六条院は、若い男たちで賑わう。光源氏の戦略どおりの展開である。「おぼししまかなふ」。

【19】「内の大殿の中將」、つまり後の柏木の登場。作者は、いかにもさりげなく柏木を語り出す。が、この巻は確実に柏木に焦点が合わされていることに着目すべきである。しかし、読者の方は、印象的な兵部卿に眩惑されてしまつて、それと気づくのは、なかなか容易な事ではない。(16)。

【20】実の妹とも知らず「えしもうち出でぬ中の思ひに」身を焦がす柏木。世紀末的構成である。「ことの心を知ら」ぬのも、柏木の迂闊さの表示となっている。後に、近江君を連れてくる失態への軽い予兆でもあろう。

【21】兵部卿は長年連れ添った北方を失って三年目。ただいま独身である。彼は光源氏の親友で、花宴に初出。北方は弘徽殿女御の妹で、美貌の人であった。以後、須磨・絵合・少女の各

巻に姿を見せている。本格的に登場するのは、玉鬘問題の発生以後である。この「藤の花をかざして、なよびさうどきたまへる御さま」は、その役柄にふさわしい。彼は面食いの気がありそうで、母・夕顔に似て、美貌のひとつである玉鬘の相手として恰好である。

【22】兵部卿と光源氏の贈答に、「淵に身を投げ」る云々となるが、屈原のことを言っているのか。単に、藤と淵との掛け詞のためだけなのか。屈原の出でくる必然性には乏しい。この贈答は、桐壺巻の桐壺帝と左大臣のやりとり に似ていて、玉鬘の結婚相手が兵部卿であるという印象を決定的にしている。

【23】翌日、中宮の季の「御説経」が引き続いて催される。家に帰らず、六条院で「日の御よそひ」に着替える人々も多かったらしい。開始は午の時からである。「殿上人なども、残るなく参る」とあるから、ほとんどの貴族が集合したものと知れる。この行事の盛儀でもって、中宮の権威は確立したものと推測される。それにしても、六条院はほとんど内裏の感覚である。殿上人たちは、仕事をほったらかして、光源氏の私事につきあっているのである。もっとも、この日は、中宮の行事であるからよしと考えるべきか。ともかくにも、光源氏の栄華の程の物凄さ、歴然たるものがある。

【24】中宮の御説経に、紫上から花を贈る。紫上の名代、鳥と蝶との装束をさせた八人の童、金銀の瓶に桜と山吹をいけて、船でゆかせる。巻の初めの船の場面の、逆コースで、これが答礼。今度は船を中宮の御殿から眺める。うまい構成である。こ

のあたり、極楽の、迦陵頻伽の声が聞こえてくるようで、まさしく「生ける仏の御国」からの使者にふさわしい。

【25】夕霧が紫上の消息を中宮に渡す役目をしている。この時、夕霧十五歳。凛々しい若者であったものと想像される。

【26】紫上が中宮に贈った歌「花園の胡蝶をさへや下草に秋まつむしはうとく見るらむ」は、同じく中宮が、去年の秋、紫上に贈った歌「心から春まつ園はわがやどの紅葉を風のつてにだに見よ」の返歌である。あれは、少女の巻。玉鬘、初音の二巻を間に置いて、スケールの大きさを感じさせる構成である。紫上は、中宮に匹敵する存在であることの強調でなくてはならぬ。

【5】。

【27】紫上と秋好中宮の贈答を書いて、肝心の季の御読経の場面を作者は省略している。秋好中宮を圧倒する紫上の春の栄華を書き留めることが、このあたりの目的であれば、これもしかたなからう。

【28】この巻の後半は、玉鬘を巡る男たちの紹介である。「親がり果つまじき御心」をもつ光源氏。他人とも知らず世話をやく真面目な夕霧。実の妹だとも知らず身をやく柏木。恋の相手に相応しくみえる兵部卿。恋の山には孔子も倒れるといった風情の右大将・髭黒。役者は揃っているのである。

【29】紫上と玉鬘は、初音巻の「踏歌のをりの御対面ののちは」「聞こえかは」す間柄となっている。玉鬘は紫上のライバルではない。

【30】玉鬘のひととなり。「けしきいと労あり、なつかしき心ば

へ」の人。世慣れて気さくな性格であったとみえる。六条院の女方にも、評判がよかったらしい。したがって、この玉鬘が、男の世界において人気を博すのは当然であろう。

【31】光源氏の目からみた玉鬘は「似るとはなけれど、なほ母君のけはひによくおぼえて、これはかどめいたるところぞ添ひたる」である。顔は、それほど夕顔に似ていない。雰囲気は似ている。夕顔になかった才気がある。作者はここで、玉鬘は父親・内大臣似であることを言っている。藤原の血脈の強調は、実情を知らずに世話をやく夕霧や、実の妹に恋をする柏木の強調作用があることに注意したい。

【32】「更衣のいまめかしう改まれるころほひ」。ここから夏。花散里の季節である。が、地味な花散里にかわって玉鬘が表面に出てくるのは自然な展開であろう。

【33】光源氏は、玉鬘の西対に行つては、集まる男たちからの恋文を見、批評していたらしい。光源氏の手紙論、あるいは男女交際の秘訣伝授が期待されることろだ。

【34】兵部卿は、昔から光源氏が心を許した兄弟であった由。

彼はかつての頭中将の役柄を継ぐ存在である。昔はそれほど好色という程ではなかった。最近、そうだった。若いころ早くに理想の人にめぐりあい、兵部卿は幸せであったのだ。三年前、その美貌の妻を失って、彼もまた妻に似た人を探すようになっておくと見える。恋の場数を踏んだ男ではないことも、注意しておく必要がある。彼は、どちらかといえば光源氏より夕霧に似た男であったと思われる。この兵部卿の設定は、かつての頭

中将が今や内大臣の地位にあり、光源氏の政治的対立者の立場に移行してしまっていることと無関係ではない。

【35】光源氏は、兵部卿のことを「世の末に、かく好きたまへる心ばへを見るが、をかしうもあはれにもおぼゆる」と言っている。この言葉、そのまま自分に返ってくる言葉ではないか。

彼は、兵部卿と同世代の男なのだ。いい年をして、という言葉はこの際禁句であろう。「かの親王よりほか、また言の葉をかはすべき人こそ世におぼえね。いとけしきある人のさまぞや」も、実は自分のことを言っているのだと理解したほうがよい。

光源氏は、兵部卿同様、まだまだ恋の現役なのだ、ということをおこは意味する。

【36】右大将、つまり髭黒。「恋の山には孔子のたふれ」とある。彼は、真面目な堅物であつたとみえる。兵部卿をもっと固めると彼になる。いふなれば夕霧の未来形みたいな男である。

【37】作者は、数ある恋文のなかで、「唐の縹の紙の、いとなつかしう、しみ深う匂へる」文で「いと細く小さく結びたる」文を、クローズアップする。はなはだ意図的である。誰からのだと聞く光源氏に、玉鬘が「はかばかしうも」答えないという処置も、この手紙をひどく印象的なものとしている。兵部卿や髭黒、それに光源氏といった旧世代とは鮮やかに違った新世代の登場。という印象が深い。が、柏木の「思ふとも君は知らじな」は、自分自身にたちかえる皮肉なフレーズである。彼は玉鬘が実の妹だと知らない。これは誰からの手紙だという光源氏の問いに「はかばかしうも」答えられない苦しい玉鬘の設定もよい。

それだけ光源氏に、この手紙が強い印象を与えるからである。

【38】右近に注意する光源氏。「人選りして、いちへなどはせさせよ」。そして言う。「すきずきしうあざれがましき今やうの人の、便ないことし出でなどする、男の咎にしもあらぬことなり」。近未来の、柏木三宮事件の予告となっている。あるいは、髭黒玉鬘事件をも視野にいれた設定だろうか。

【39】恋文をもらった時の対処のしかた。すぐに反応してはいけない。風情を知らぬ情けない女だと相手に思われるくらいでちょうどよい。「すべて女のものづつみせず、心のままに、もののあはれも知り顔つくり、をかしきことも見知らむなむ、その積りあじきなかるべき」。風流に流れた女の末路は悲しい結果となる。『紫式部日記』に記された清少納言批判の部分と発想が同じである。光源氏の玉鬘教育が具体的に描かれている条だが、これは、これまで行われてきたはずの紫上教育の具体的描写、あるいは、これから行われるはずの明石姫君の中宮学がともに具体的に描写されていないという事実を補完する部分であらうと心得て読むべきである。

【40】環境の影響も無視できぬ。田舎びていた玉鬘も、六条院の人をみている内に、今では「いとど飽かぬところなく、はなやかにうつくしげ」になっている。紫上に近づいたことも良い作用をしている。彼女が知的女性で、学習能力にたけていたればこそである。【30】。

【41】さて、「思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏る水に色し見えねば」という「若やかに結ばはれたる」文に光源氏がこだ

わる。(37)。右近を呼び、さんざんに手紙論や恋人への対処の仕方の講釈をやったうえで、またこの手紙に戻り、この手紙を話題にする。光源氏の意識がその間、この手紙から離れなかった証拠である。そして、この手紙が「内の大殿の中将」つまり

内大臣の息子・柏木からの手紙であることを知る。「見所ある文書きかな、など、とみにもうち置きたまはず」。光源氏が、この手紙にあらためて注目する。この、念のいった語り口、この実にもたいぶった設定は、作者が明確に若菜下巻の展開を意識しているからだと知れよう。敷物の下に発見した手紙から、女三宮と柏木の不倫を光源氏が即座に知りえたのは、まさしくここで、この柏木の文に着目し、脳裏にその筆跡を焼き付けたからにはほかならない。われわれ読者は、この場面、この事実を若菜下巻まで忘れてはいけないのである。作者は、少なくともこの時期、すでに、若菜巻を目指した仕事を粛々とやっているのであるから。(38)。

【42】柏木が玉鬘に接近しえたのは、玉鬘の側に仕えている「みるこ」を以前から知っていたからだ。とある。女三宮事件の伏線のように不気味である。また、「みるこ」の実体が明らかでないで、よくわからないが、柏木が「みるこ」を通して玉鬘情報を手に入れるルートを確認していたことは分かる。なのに、実の妹だと知らぬのは迂闊である。光源氏の柏木評「いとしづまりたる人なり」は、大いなる誤解である。次に展開する近江君騒動は、柏木ならでは招来しえなかった事件というべきであろう。(20)。

【43】光源氏の言によれば、柏木はまだ「下臈」「公卿」となっていない。

【44】光源氏は、玉鬘をちゃんと一人前にしてから内大臣と対面させようと考えている。これは、実の親の感覚である。この光源氏の心理の微妙な変化は、見事な柏木の文を見たことも影響していると思う。こういう柏木のレベルに玉鬘が達してから、内大臣のところに差し出すのがよいと光源氏は考える。早急な玉鬘教育が予測されるところだ。

【45】光源氏の兵部卿論。「人柄といったうあだめいて、通ひたまふ所あまた聞こえ、召人とか、憎げなる名のりする人どもなむ、数あまた聞こゆる」。かつての光源氏的人物である。この人とうまくやってゆけるには、紫上のような広い心をもった人でなければ無理だと言外に言っているものと思われる。これは、後で出てくる真木柱姫君の不幸の予告かもしれない。(若菜下巻)。しかし、さきほどまで、あんなに兵部卿をもちあげておいて、ここでこんなに落とす。光源氏は、自分が一番だと思っているからにはほかならない。

【46】「召人」だが、世間から認知されぬ愛人。日陰者の扱いを受けていた人々で、高級貴族の家には、かなりいたものと考えられる。

【47】髭黒大將は「年経たる人の、いたうねび過ぎたるを、厭ひがてらに求むなれど、それも人々わずらはしがなるなり」で、複雑な家庭の事情があるらしい。「年経たる人」が、実は紫上の姉であるということを、まだ作者は黙して語らない。

【48】光源氏は、玉鬘に「さばかりの御齡にもあらず」という。この時、玉鬘は二十一歳。たしかに子供ではない。大人の判断、おとなの言動のできる年齢である。このあたりの魅力も、この玉鬘の知的レベルによっていることが理解される。

【49】「まろを、昔ざまになずらへて、母君と思ひないたまへ」と光源氏は無茶なことを言う。彼の台詞「後の親」は、帚木巻で空蟬のことをこう呼んだ場面を想起させる。玉鬘に、これから迫ろうとする彼は、空蟬に迫ってものにした伊予介のイメージではないか。

【50】玉鬘の歌。「今さらにいかならむ世か若竹の生ひはじめむ根をばたづねむ」は、前巻の明石姫君の歌「ひきわかれ年は経れども鶯の巢立ちし松の根を忘れめや」を完全に意識して作られたものとしれよう。玉鬘の向こうに、明石姫君の教育があるという視点を忘れて、玉鬘十帖を読むべきではない。

【51】物語を見て反省する玉鬘。このあたりで、実の親への志向と光源氏への志向がすりあつたと見るべきか。これ以後は、玉鬘の心は光源氏の方へ傾斜してゆくことになる。さて、この条、当時の物語の読まれ方を示していて面白い。実の親になかなか逢えず苦労する物語が、けっこうあったものと知れる。この源氏物語も、物語の伝統的機能、つまり姫君教育的側面をもっているわけで、光源氏の論陣は、それを期待する読者層を意識したものであることが分かる。

【52】光源氏は夕顔を回想して「あまりはるけどころなくぞありし」と言っている。「はるけどころなし」とは、どういう意

味なのだろうか。一方、玉鬘のほうは、母親と違って「ものありさまも見知りぬべく、け近き心ざま添ひて、うしろめたからず」という批評。これから逆に考えて、世間知らずで何をしでかすかからぬ危険な女といったような意味であろうかと思われる。

【53】紫上は、玉鬘とすでに出会っている。彼女の玉鬘評は「ものの心得つくはものしたまふめる」である。知的でしっかりした女であることを認めている。しかし、紫上は光源氏の「ただにしもおぼすまじき御心ざまを見知」っているから、光源氏に玉鬘が「うらなくしもうちとけ、頼みきこえたまふこそ心苦しけれ」と言った。ここで、紫上が玉鬘の迂闊さに言及しているところ、兄の柏木との血の繋がりを示す結果となっている、おもしろい。

【54】紫上に玉鬘のことを語り、心根を見透かされた光源氏が「ひがひがしうけしからぬ」自分自身を思い知り反省する。こは、紫上の光源氏操縦法の手並の鮮やかさが際立つ条である。朝顔の時と違って、玉鬘問題について、紫上は余裕綽々である。彼女は、この時、今の玉鬘のような状態であった昔の自分をのことを楽しく思い出しているのではないか。若紫から葵巻までの時のことである。

【55】初夏。雨あがりの夕方の場面。玉鬘に夕顔の面影を追う光源氏の心理は、晩年のゲーテのようにやるせない。「橘のかをりし袖によそふればかはれる身とは思はえぬかな」。後戻りもやり直しもきかぬ中年の、分かっているのに止められない行

為。ついに光源氏は玉鬘の手をにぎる。「手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり、肌つきのこまやかにうつくしげ」と本文にはある。忘れられない夕顔そのままであったにちがいない。つぶつぶと肥えるという肉感的表現は空蟬巻、軒端萩に対する表現以来である。軒端萩は夕顔型の女であったことを思い出し、てほしい。

【56】添い臥しながら自制する光源氏は、昔の光源氏ではない。ずっと後の薫のようである。「おぼろけにあまる忍ぶるにあまるほどを、なぐさむるぞや」「昔恋しきなぐさめ」が彼の本心で、この行為が「ゆくりかにはあはつけきこと」ということは、充分に自覚しているのである。作者は、草子地で「いとさかしらなる御親心なりかし」「うたてある心かな」と、終始玉鬘側にたって光源氏を糾弾すべく読者を誘導している。これは、紫上の立場である。

【57】光源氏は言う。「限りなく、そこひ知らぬ心ざしなれば、人の咎むべきさまにはよもあらじ」と。あなたを、底知れず愛しているから、自分は貴方を傷つけることは絶対しない。この光源氏の言葉、奇妙な説得力がある。彼は、ひょっとして、他人としてではなく、実の娘として玉鬘を愛しているのではないか。ならば、彼は、玉鬘が内大臣と夕顔との間に生れた女であるという現実が許せなかったのである。もし、光源氏が、玉鬘に手を出してしまつたなら、彼は、この忌まわしい現実を認めてしまうことになる。それは断じて避けねばならぬ、と、光源氏は心の底で思っているのではないか。これは、言い換えれば、

夕顔に対する愛情の底知れぬ深さの証明でも或る。光源氏のやるせなさは、ここに極まつたというべきではないか。

【58】玉鬘は歳はいっているが、全くの処女で、男と女の中を知らない。「これより気近きさま」に思い及ばない。で、傷物にされたと深刻に悩んでいる。玉鬘の可愛らしさの理由の一つであらう。

【59】昔、「あてき」と呼ばれた兵部も健在。彼女は、玉鬘の側近であるはずだけれども、光源氏の振る舞いに感謝している。もつて、光源氏がいかに巧妙に立ち動いたかを知ることが出来る。

【60】後朝でもないのに、後朝めいた文を寄越す光源氏。彼は何も知らぬ処女をからかっている中年のいやらしい小父さんなのである。読者もそう思うはずだ。「うたてある心かな」と。

【61】こういう場合は「うけたまはりぬ。乱りごちのあしうはべれば、聞こえさせぬ」と答えるのが正解。玉鬘の返事は、作法にかなっている。

【62】玉鬘が光源氏に対する返事に使用した「ふくよかなる陸奥紙」であるが、これは普通のお知らせに使用するもので、恋文には縁遠い。さらにごわごわとして厚い紙だ。これは、柏木が寄越した恋文である薄い「唐の縹の紙」を意識した構成なのではないか。

【63】事実、最後に「岩漏る中将」柏木にわざわざ言及したところ、作者のなみなみならぬ意図がうかがえよう。この巻は、彼を強調し、彼を売り出す巻でもあるのである。柏木は今、光源氏に認められたことを知り、舞い上がっているらしい。